

東かがわ市埋蔵文化財調査報告 第4集

辻 田 南 遺 跡

県営農村振興総合整備事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2009.3

東かがわ市教育委員会

序

今回報告する辻田南遺跡は引田地区に所在する、古代から近世にかけての集落跡であります。調査は基盤整備事業に伴うもので、香川県東讃土地改良事務所より委託を受け、平成20年の年末から翌年当初にかけて実施しました。調査は平野を北に望む丘陵地で実施され、掘立柱建物跡・土坑をはじめ古代および近世の遺構が確認されています。また、隣り合う丘陵でも古代や中世の遺跡が所在しています。今回の調査は山間部に営まれた今日までつづく集落の文化や歴史的変遷を考えるうえでの、新たな資料となりました。

東かがわ市内には多くの有形無形の文化財が残されています。東かがわ市教育委員会では郷土の歴史と文化を理解するうえで重要なこれらを、次の世代に伝えることができるよう取り組んでいます。つきましては本報告書が、埋蔵文化財の保護の一助になるとともに、地域の歴史研究においても活用していただければ幸いと存じます。

最後になりましたが調査に際し、地元の皆様をはじめ関係各位より、多大なるご理解・ご協力を賜りましたことに対して、衷心より感謝の意を表します。

平成21年3月

東かがわ市教育委員会
教育長 橋本 昂

例　　言

1. 本報告書は、東かがわ市教育委員会が平成20年度に実施した、辻田南遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査の実施にあたっては東かがわ市教育委員会が調査主体となり事務を、調査実務は東かがわ市教育委員会の依頼を受け大川広域行政組合理蔵文化財係が実施した。
3. 本報告書の作成は大川広域行政組合理蔵文化財係が実施した。発掘調査および執筆・編集は阿河銳二が担当した。調査作図には松村春美が、整理作図浄書には多田歩が担当した。
4. 本報告書で用いる方位の北は、国土座標系（世界測地系）である。縮尺は掲載図面内にスケールで示した。また遺構の略号は下記のとおりである。
S K:土坑　　S B :掘立柱建物跡　　S D :溝　　S X :不明遺構
5. 本報告書の中の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票『新版標準土色帖1998年度版』を使用して表す。
6. 調査及び報告書作成に際しては、地権者及び地元関係者・関係諸機関にご理解とご協力を頂いた。記して謝意を表したい。
香川県東讃土地改良事務所 (株)池田組 (社)東かがわ市シルバー人材センター

目 次

序

例言

第1章 調査に至る経緯と経過	1
第2章 立地と環境	4
第1節 地理的環境	4
第2節 歴史的環境	4
第3章 調査の成果	8
第1節 概要	8
第2節 S区について	11
(1) 層序	11
(2) 土坑	12
(3) 不明遺構	16
(4) 溝	17
(5) 柱穴	20
(6) その他の遺物	20
第3節 N区について	22
(1) 層序	22
(2) 土坑	25
(3) 掘立柱建物跡	31
(4) 溝	32
(5) 不明遺構	34
(6) 柱穴	35
(7) その他の遺物	35
第4章 まとめ	36

出土遺物観察表

報告書抄録

挿図目次

第1図	東かがわ市辻田南遺跡位置図	1
第2図	周辺遺跡位置図	5
第3図	調査区位置図	8
第4図	S区遺構配置図	9・10
第5図	S区南壁・東壁土層図	11
第6図	S区SK01・02平・断面図および出土遺物	12
第7図	S区SK03・04平・断面図および出土遺物	13
第8図	S区SK05平・断面図および出土遺物	14
第9図	S区SK06・SX01平・断面図	15
第10図	S区SK06・SX01出土遺物	15
第11図	S区SX02平・断面図および出土遺物	17
第12図	S区SD01平・断面図	18
第13図	S区SD02出土遺物	18
第14図	S区SD03平・断面図および出土遺物	19
第15図	S区その他の遺物①	21
第16図	S区その他の遺物②	22
第17図	N区遺構配置図	23・24
第18図	N区東壁・北壁土層図	25
第19図	N区SK01平・断面図	26
第20図	N区SK02～05平・断面図および出土遺物	27
第21図	N区SK07平・断面図および出土遺物	29
第22図	N区SB01平・断面図	31
第23図	N区SB02平・断面図	32
第24図	N区SB03平・断面図	33
第25図	N区SD01・SX01平・断面図	33
第26図	N区SD02平・断面図および出土遺物	34
第27図	N区SX01出土遺物	35
第28図	N区その他の遺物	35

図版目次

- | | | | |
|-------|--------------------|-------|-----------------------|
| 図版 1 | S 区発掘調査作業状況 | 図版 11 | N 区 SK07 西土坑検出状況 |
| | S 区 SK01 断面土層 | | N 区 SK07 完掘状況 |
| 図版 2 | N 区遺構検出状況 | 図版 12 | N 区 SB01 完掘状況（南から） |
| | N 区 SK03 調査状況 | | N 区 SB01・02 完掘状況（西から） |
| 図版 3 | S 区遺構検出状況 | 図版 13 | N 区 SB03 完掘状況（西から） |
| | S 区遺構完掘状況（北東から） | | N 区 SD01・SX01 完掘状況 |
| 図版 4 | S 区遺構完掘状況（南東から） | 図版 14 | N 区 SD02 遺物出土状況 |
| | S 区 SK01 完掘状況 | | N 区・SX01 遺物出土状況 |
| 図版 5 | S 区 SK03 完掘状況 | 図版 15 | 出土遺物（1） |
| | S 区 SK04 遺物出土状況 | 図版 16 | 出土遺物（2） |
| 図版 6 | S 区 SK05 完掘状況 | 図版 17 | 出土遺物（3） |
| | S 区 SK06・SX01 検出状況 | 図版 18 | 出土遺物（4） |
| 図版 7 | S 区 SX02 検出状況 | 図版 19 | 出土遺物（5） |
| | S 区 SD01 検出状況 | 図版 20 | 出土遺物（6） |
| 図版 8 | S 区 SD02 遺物出土状況 | 図版 21 | 出土遺物（7） |
| | S 区 SD03 検出状況 | 図版 22 | 出土遺物（8） |
| 図版 9 | N 区完掘状況（北東から） | 図版 23 | 出土遺物（9） |
| | N 区完掘状況（南東から） | 図版 24 | 出土遺物（10） |
| 図版 10 | N 区 SK04 完掘状況 | | |
| | N 区 SK07 検出状況 | | |

第1章 調査に至る経緯と経過

今回報告する辺田南遺跡は東かがわ市引田に所在する。引田地区平野部に広がる水田地においては平成19年度より、「県営農村振興総合整備事業」が継続実施されている。各年度事業対象地における埋蔵文化財の有無確認のための試掘調査については、香川県教育委員会によって実施されている。平成20年度対象地については、周知の埋蔵文化財包蔵地「辺田北遺跡」・「辺田南遺跡」が含まれており、平成19年12月に実施された試掘調査では、「辺田南遺跡」内において遺構の広がりが確認されたものである。遺構は微高地上の水田数筆にまたがるもので、基盤整備工事によって影響を受ける箇所については、発掘調査による保護措置が必要とされたものである。この結果を受け、



第1図 東かがわ市辺田南遺跡位置図

東かがわ市教育委員会では、香川県教育委員会と協議を行い平成20年度発掘調査にむけて、予算措置を図った。平成20年度に入り香川県教育委員会・香川県東讃土地改良事務所・東かがわ市の三者で適宜協議が行われ、発掘調査対象範囲についての確認作業を行った。これにおいて設計変更による現状保存を図りつつも削平などが及ぶ範囲については、発掘調査を実施することとなった。また、発掘調査は事業実施に合わせて行うこととなり、香川県東讃土地改良事務所と東かがわ市との間で、諸条件の整備が進められた。8月になりおおむねの予定が策定され、9月下旬以降に工事の見通しが得られることとなった。これに従い香川県東讃土地改良事務所と東かがわ市では、「発掘調査委託契約」を締結し、10月下旬に発掘調査に着手することとした。

なお、発掘調査の実施にあたっては東かがわ市教育委員会が調査主体となり事務を、調査実務については東かがわ市教育委員会より依頼を受け、大川広域行政組合埋蔵文化財係が職員を派遣して行ったものである。最終的に発掘調査対象となったのは南北に並ぶ水田2筆で、面積は北側が約447m²、南側が約465m²である。調査ではそれぞれをN区・S区と設定し、排土置場の制約もあって各調査区を個別に実施したものである。発掘調査着手日より年内は雨天が多く進捗に少なからず影響があり、年内終了予定を延長し、翌平成21年1月に完了することとなった。以下、発掘調査の経過及び調査体制について概略を示す。

【平成20年度調査日誌（抄）】

10月27日（月）～

発掘調査機材・用具を搬入する。また、既知の基準点及び水準点を確認後、移動する。

10月29日（水）～

重機によるS区の表土剥ぎを行う。遺構面を精査し、遺構の検出を図る。

11月11日（火）～

北東隅周辺に広がる上位堆積土を掘り下げ、下位遺構面の検出を図るとともに、柱穴・土坑・溝など各遺構の掘り下げを進める。

12月2日（火）～

遺構全体図など各種図面の作成とともに、写真撮影を行う。

12月10日（水）

S区作業を完了とする。

12月11日（木）

重機によるN区の表土剥ぎを行う。

12月12日（金）～

遺構面精査を行い、遺構の検出を図る。

12月17日（水）～

S区と同様に北東隅に広がる上位堆積土を掘り下げ、遺構面の検出を図る。

12月26日（金）～

遺構の掘り下げを本格的に進めるとともに、各実測図面を作成する。

1月13日（火）～

写真撮影とともに残る土坑の完掘を進める。

1月16日（金）

N区作業を完了し、機材・用具の撤収を行う。

1月19日（月）～

現場事務所にて土器洗浄・接合作業を進め、1月30日（金）にて現場における業務をすべて完了とする。

【平成20年度調査体制】

東かがわ市教育委員会生涯学習課

課長 長町 廣幸
副主幹 松下 学

大川広域行政組合理藏文化財係

主査 阿河 錠二
主任主事 松田 朝由
技術員 多田 歩
技術員 松村 春美

第2章 立地と環境

第1節 地理的環境

込田南遺跡は東かがわ市引田に所在する。東かがわ市は平成15年4月に引田町・白鳥町・大内町の3町が合併したものである。その市域は香川県の東端を広く占めるもので、東西に約15km・南北に約10kmに及び、面積は約155m²を測る。北は瀬戸内海に面し、東から南にかけては徳島県と接している。地勢をみると、市域南部にあたる県境付近には阿讚山脈に連なる龍王山（標高475m）や東女体山（標高667m）がそびえている。これら山地から北に向かって、市域の南半を占め丘陵性台地がつづいている。また、台地の舌端部には浸蝕によって形成された谷筋がいくつもあり、狭小な谷底平野がみられる。台地をより北には沖積平野が広がっており、河口には三角州が発達するとともに海浜部には砂堆が形成されている。また、これらの平野部や瀬戸内海岸部には、島状の独立状丘陵や山塊が点在している。このほか、与田川・湊川や馬宿川などの主要河川は阿讚山脈から発し、蛇行を繰り返しながら平野部を貫流している。

込田南遺跡の所在する引田地区は、旧引田町のおおむね中ほどに位置するものである。瀬戸内海沿岸部の砂堆上は市街地となっており、その後背に平野部が広がるものである。この平野部の三方には与治山や翼山などといった山塊がめぐり取り囲んでいる。平野北東部では小海川が天井川となって、直線状に走向している。ただこれは付け替えによる流路固定が為されたためとされる。また、平野東部では馬宿川が北流しており、地割りには氾濫の跡を見て取ることができる。

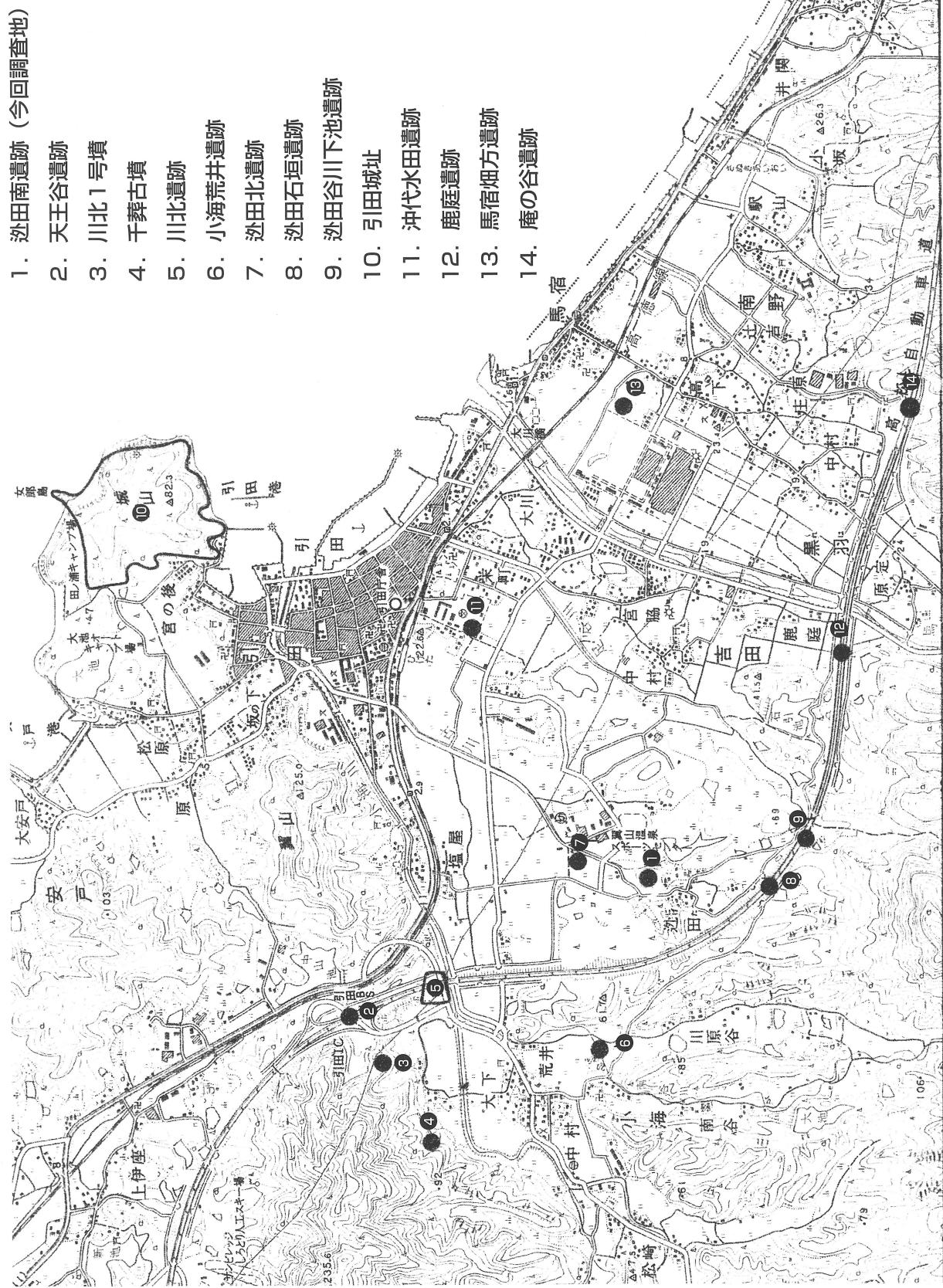
平野の南側縁部は山塊から派生する低丘陵が八つ手状に延び、入り組んだ谷筋を形成し大小様々なため池が築造されている。込田南遺跡はこれら谷筋の中に張り出した、小さな低丘陵状の微高地に形成されたものである。ちょうど谷筋が平野に向けて開口した位置にあたり、北方向の視界について見通せるものである。この微高地は最大幅が約80mで、北端に行くほど下がりつつ狭まっていく。東西両側の谷筋との比高差は約2~3mあり、現地標高で約5~9mを測る。遺跡はこの中でもやや奥に位置する、最高にちかい場所に広がっているものであり、現状では水田として利用されている。

第2節 歴史的環境

これまで東かがわ市内における遺跡の所在状況やその内容については、不明瞭なものが多い状況にあった。一部の古墳を除くと調査時期が古いものや、不時発見や表採資料などのものが多く、平野部の様相などについては特にそのような状況にあった。ただ、近年の四国横断自動車道建設工事やそれに伴う各種開発事業などによる発掘調査によって、平野部を取り囲む丘陵地上における遺跡についての知見が得られることとなった。旧引田町内及びその周辺の状況について述べる。

これまでのところ旧石器時代に属するものは遺構遺物ともに確認されていない。

縄文時代では遺構の所在は確認されていないが、黒羽・庵の谷遺跡では後期の土器片やサヌカイト製石鏃が、包含層などから出土している。また、吉田・鹿庭遺跡でも包含層から石鏃が出土しており、前期のものとされる。この他に、白鳥町との境にある天王谷でも黒曜石製石鏃が表採されている。



第2図 周辺遺跡位置図

弥生時代になると遺構の検出と遺物の増加が確認されるようになる。集落跡が確認されたのは庵の谷遺跡で、中期後半?後期初頭にかけての竪穴住居跡数棟に、土坑などが検出され土器のほかに未製品も含むサヌカイト製石器が多量に出土している。また小海地区にある小海荒井遺跡では終末期頃の竪穴住居跡数棟のほか、阿波産の土器や結晶片岩材などが出土している。鹿庭遺跡では竪穴住居跡はないが、サヌカイトの大形剥片を集積した土坑があり、後期前半の土器やサヌカイト製石鎌も出土している。また、遺物が出土しているのは辻田谷川下池遺跡より中期後半頃の土器が出土している。平野部に位置する沖代水田遺跡でも後期後半の土器が出土している。この他にも町内のいくつかの場所において遺物の出土が知られている。

古墳時代では集落遺跡として、小海荒井遺跡において前代よりつづいて営まれている。また、辻田石垣遺跡では河道跡より土師器が出土している。この他、生産遺跡として沖代水田遺跡では水田跡が確認されている。ただ、これは可能性として後代に下る余地を残るものである。次いで古墳をみると、今のところ前・中期古墳の所在は確認されていない。現在残るのは平野北西部の丘陵上にある川北1号墳である。これは推定円墳に両袖の横穴式石室をもつもので、現存長は約8.6mを測る。確認調査時に出土した須恵器により、6世紀後半から7世紀前半に位置づけられる。比高差50m以上の丘陵頂部に単独に所在することを特徴とする。

古代では川北1号墳より東に下った丘陵末端に、掘立柱建物跡群からなる川北遺跡が所在する。掘立柱建物跡は掘形が1mをこえるような大型のものもあり、長軸を揃えるなど企画性の高さがうかがわれるものである。また、周囲の平野に残る条里型地割とともに南海道及び川北1号墳との関連性が想定される。また、小海荒井遺跡においても掘立柱建物跡や須恵器の出土が確認されている。この他、馬宿川河口付近の東岸に位置する馬宿畠方遺跡では、包含層などより製塩土器が多数出土している。なお、古代律令制下において南海道が大坂峠を下り西へ横断していたとされ、さらに駅が置かれていたとされる。ただ、南海道のルートを含め駅の所在地について、現在のところ確定されていない。

中世になると先にみた丘陵上に位置する辻田石垣遺跡・辻田谷川下池遺跡・鹿庭遺跡・庵の谷遺跡などで、掘立柱建物跡からなる集落跡が確認されている。また、天王谷遺跡では瓦窯が2基検出されている。辻田石垣遺跡よりこの瓦窯で製作された軒先瓦などが、少量であるが出土している。なお、引田は瀬戸内海航路での風待ちの港であり、この頃より湊町と栄えていたとされる。

近世では16世紀代から引田の町の北側にある、城山付近に城郭が所在したとされる。三好氏や長宗我部氏、豊臣氏の衝突などにおいて記載があるも、その所在地ははっきりとしない。現在城山山頂に残る引田城跡は、その築城者がいざれであるかなお課題であるが、高石垣をはじめ曲輪の周りに石垣を巡らし、礎石・瓦葺きの建物をもつものである。生駒氏治世下の一国一城令にて廃城になったとされる。この他にも黒羽には馬宿川が平野に抜けた間際の細長い尾根上に黒羽城跡がある。三方が急斜面となった要害地で、南西先端に比高差2m前後の高くなつた小曲輪があり、北端には土壘を残す。

参考文献

『引田町史』 1995 引田町教育委員会

『川北1号墳発掘調査報告書』 1985 引田町教育委員会

『香川県中世城館詳細分布調査報告』 2003 香川県教育委員会

『金比羅山遺跡 I・塔の山南遺跡・庵の谷遺跡』 2000 (財) 香川県埋蔵文化財調査センターほか

『込田石垣遺跡・込田谷川下池遺跡・鹿庭遺跡』 2002 (財) 香川県埋蔵文化財調査センターほか

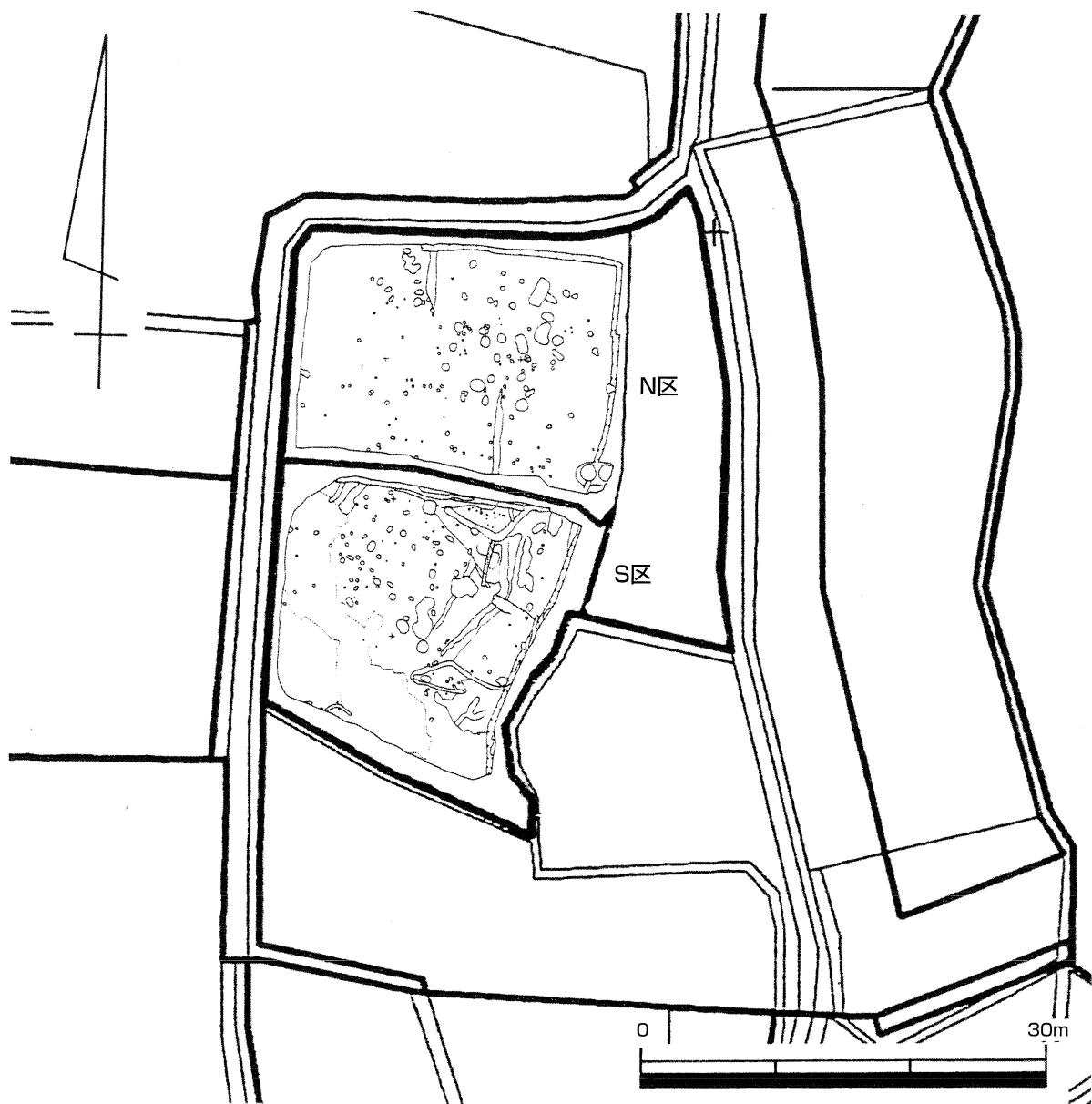
『川北遺跡・三殿出口遺跡』 2004 香川県教育委員会ほか

第3章 調査の結果

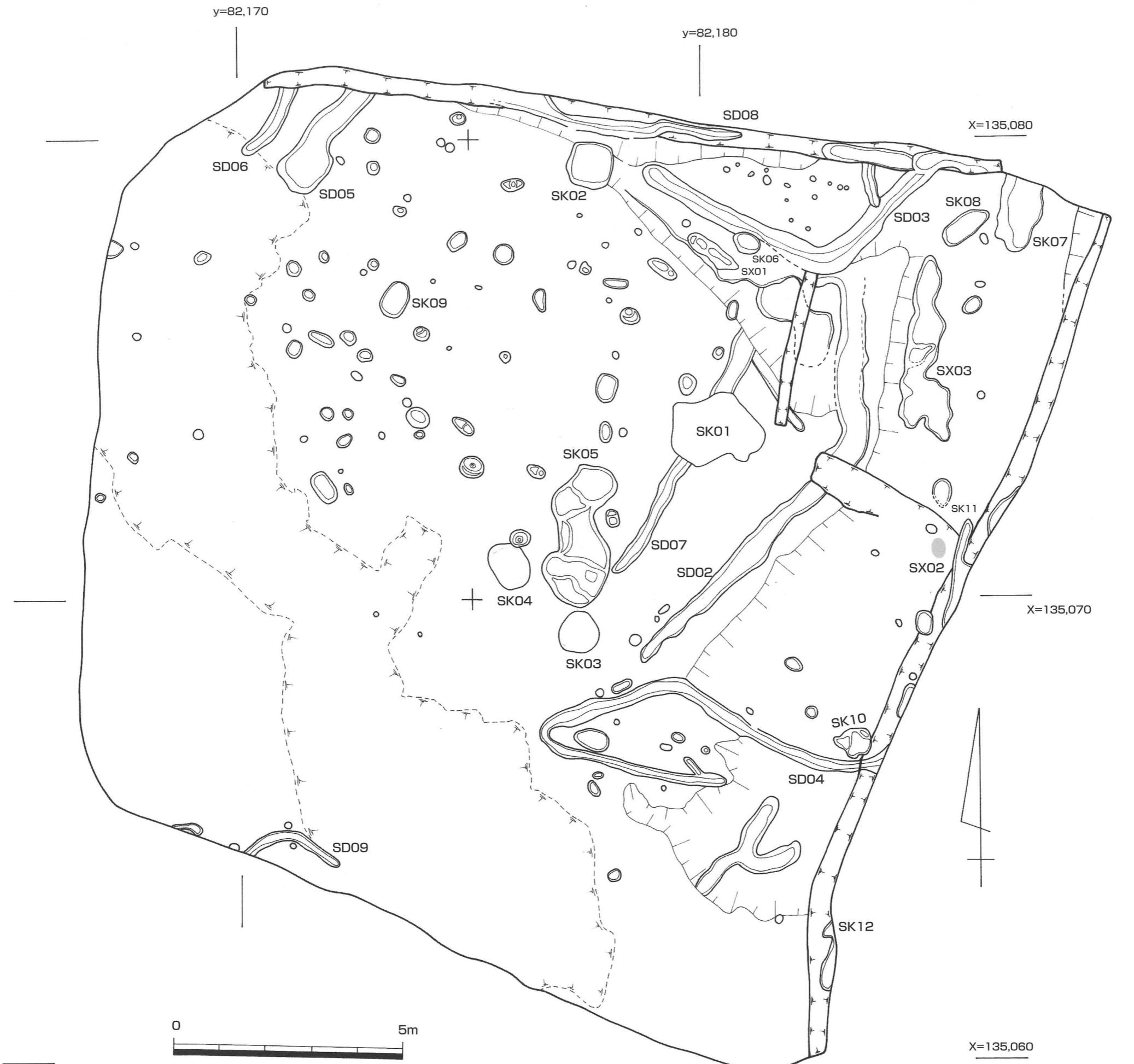
第1節 概要

先述したように辻田南遺跡は平野に面した低丘陵先端の微高地上に位置する。調査対象地は現在水田の2筆であるが、試掘調査によって確認された遺跡の広がりは、隣接する南側と西側の水田に及ぶものである。南側の続きは宅地となっているが、かつては遺物の出土があったとされる。また、丘陵地を遡上すると谷奥に辻田石垣遺跡・辻田谷川下池遺跡が所在しているなどことから、遺跡は低丘陵地を包括するようすることもうかがわれる。

さて、調査に際しては水田2筆をS区・N区とした。地表面で標高約7.3mと6.9mを測る。あぜ道を挟んだ西側は約7.9mで、南側は一段高く約8.4mとなっている。また、東側は比高差が1m前



第3図 調査区位置図



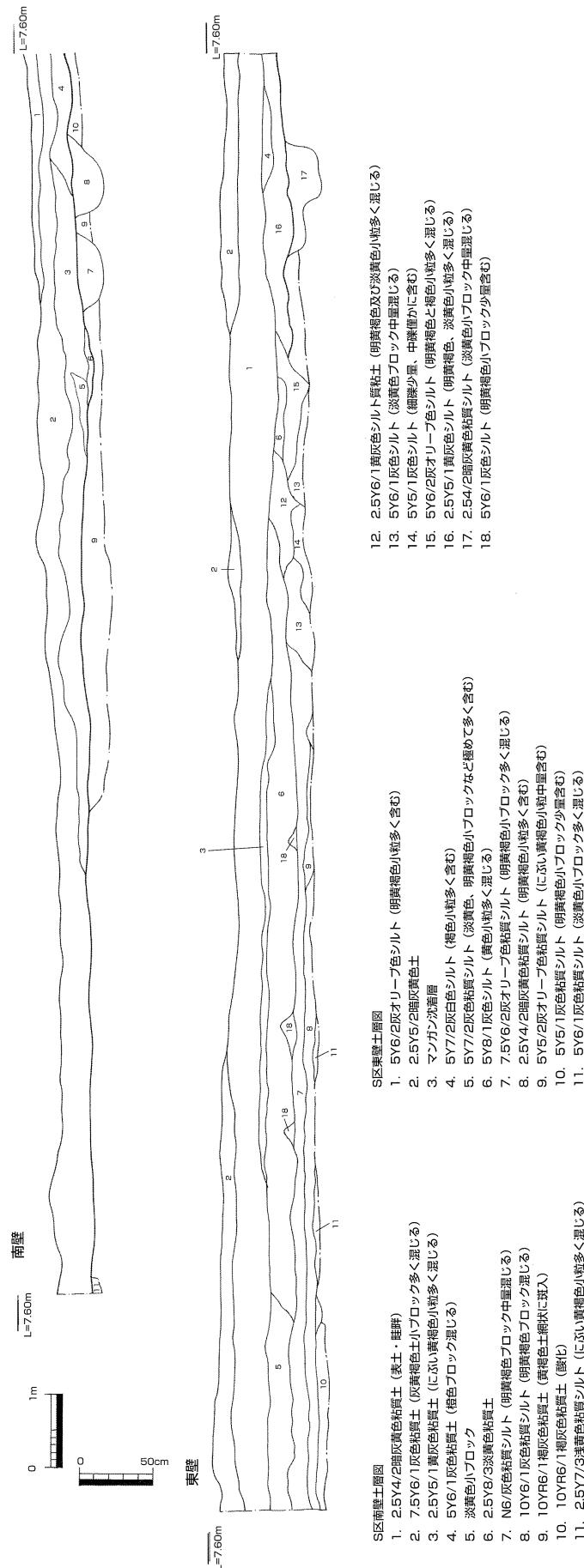
第4図 S区遺構配置図

後の落ちとなっている。さらに東は1m以上の低くなった谷筋である。このように調査区は丘陵の中心からやや東寄りにあたるものであり、旧地形ではその地形変化点を含むものといえる。

第2節 S区について

(1) 層序

S区にて検出された遺構の概略であるが柱穴多数に、溝・土坑を主体とするものである。重機による表土剥ぎ時に西側において深掘りしてしまったが、遺構の分布では南西隅から南東隅にかけては密度がきわめて低いものである。遺構は調査区中心より北から東にかけて所在するものといえ、旧地形の改変がうかがわれる。土層序をみると南壁では遺構検出面とする地山、褐灰色粘質土までは地表面から30cmほどで、標高は約7.2~7.3mの間でほぼ平坦である。東壁をみると南東隅から北へ4mほどは標高約7.1mでつづくが、それからは段状に標高約6.9mあたりに落ち込んでいる。地山面はおおむねこのまま北東端までつづくものである。この段を埋めるのは調査区北壁から南斜めに横切り、東壁から3~4mのところを南に折れそのまま延び、南東隅にかけて弧を描く層界北側の土層である。調査においては遺構検出面の地山と比べ混濁した土層がみられるもので、北側と東側ではやや異なるものであるが二次堆積土とした。東壁では南側より順次掘り込んだ様子がみられ、中ほどから北では地山面より上にて灰黄色土などの水平堆積がみられる。その後現耕作土下に層厚20cm前後の灰色土と、その下位には第二酸化鉄層を帶状に認められることから、現状区画前の水田として利用されていたと考える。北壁では北西端では地山面は標高約7.1mを測り、二次堆積土範囲にかけては東に向かって傾斜している。地山面は標高約6.9から東端では6.8mとなる。現耕作土との間には灰黄色土や灰白色土などがあり、西から東にむけての堆積がみられる。

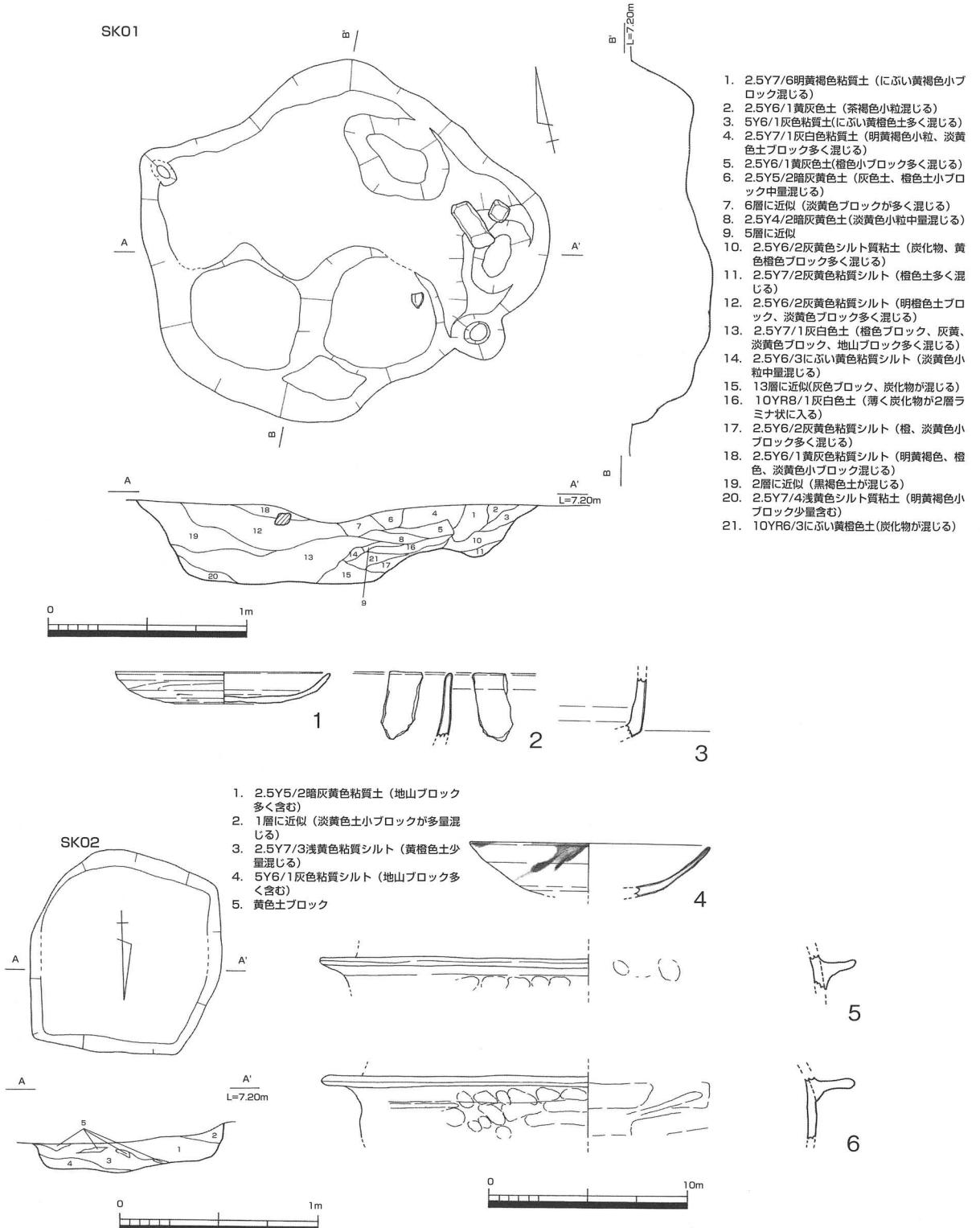


第5図 S区南壁・東壁土層図

(2) 土坑

SK01

調査区の中ほどのやや東よりに位置するもので、SD07を切り込んでつくられているものである。平面形は不定形なやや丸まった五角形状を呈するもので、規模は長軸が約205cm、短軸は185cmを測る。検出面からの深さは最大で約40cmを測る。底面の状況は一様ではなく、北半分が10cmほど高くなっている。また、東側壁の立ち上がり間際も北半分の底面と比して高くなっている。南には



第6図 S区SK01・02平・断面図および出土遺物

柱穴状の掘り込みがみられる。また、北西隅にも同様な掘り込みがある。北半分の底面も北から南方向にかけ下っていき、その内部は平坦ではなくところどころにくぼみがある。南半分は北側との段差でもって長楕円形状に平坦に近い面となっているが、僅かに中ほどが高くなっている。また、南壁立ち上がりも段状になっている。土層をみると東側において炭化層と灰層の堆積がみられた。これは掘形直上にみられたものではなく、東側掘形の傾斜にそっておいた地山混じり土の上に構築したとおもわれる。ただ、明確な焼土や被熱痕は認められず、礫が僅かにあったが配置しているというのではなかった。

遺物は埋土より土器小片が出土している。1は備前焼の灯明皿で口縁内面には炭化物の付着が認められる。2は肥前系陶胎染付の口縁部である。3は袋物とおもわれる。これらは18～19世紀前後のものとおもわれる。

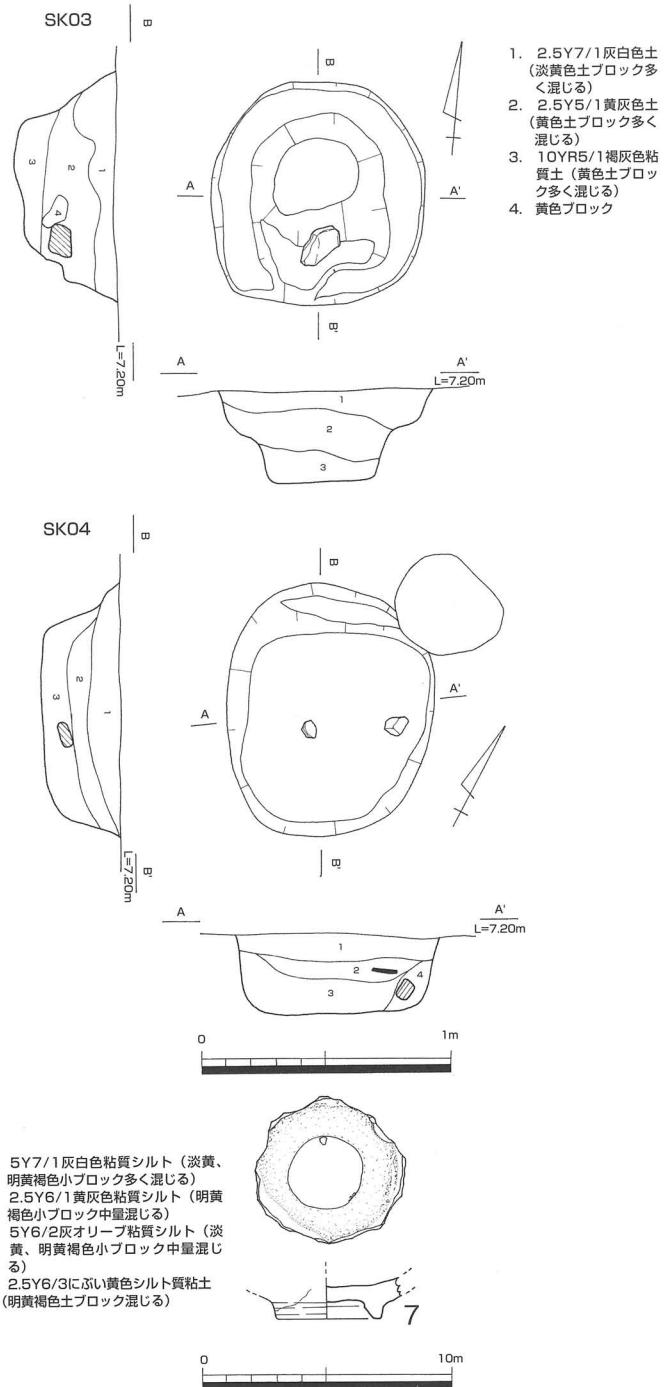
SK02

調査区中ほどの北壁際に位置するものである。平面形は方形を呈し中ほどがやや角張る。規模は長軸が約100cm、短軸は約95cmで検出面からの深さは約25cmを測る。底面はほぼ平坦であるが、僅かに東側が低くなっている。底面からの立ち上がりは部分によっては急なものとなっている。埋土には地山ブロックの混入を強く認められる。

遺物は4～6などの土器破片が数点出土している。4は肥前系青磁で17世紀後半頃のものである。5・6は羽釜で、5は土師質、6は瓦質のもので18世紀後半頃である。

SK03

調査区の中ほどにあたるSK05のすぐ南側、SK01からは南へ約4m離れてある土坑である。平面形はやや楕円形を呈するもので、南側がやや扁平がかるものである。規模は長軸が約90cm、短軸は約85cmを測り、長軸はおおむね南北方向をとるものである。掘形をみると2段掘りになっており、検出面からの深さ約15cmのところに幅約15cmの段がまわっている。ただ南側は同じ高さではまわ



第7図 S区SK03・04平・断面図および出土遺物

らざに一段低くなっている。底面はおおむね平坦で直径40～50cmほどのものである。埋土には地山ブロックの混入が目立っていた。

なお、遺物は出土していない。

SK04

SK03の北西1mのところにあるもので、平面形は長楕円形を呈しているが北東隅は柱穴によって切り込まれている。規模は長軸が約100cm、短軸は約82cmを測る。主軸方向は西へ約25°ふっている。検出面からの深さは約30cmで、底面はほぼ平坦である。掘形では底面から緩やかに立ち上がり直上方向につづくものである。また、北側ではやや段状のものとなっている。埋土は灰色系土を主とするものであるが、上層では地山ブロックの混入が目立つものであった。

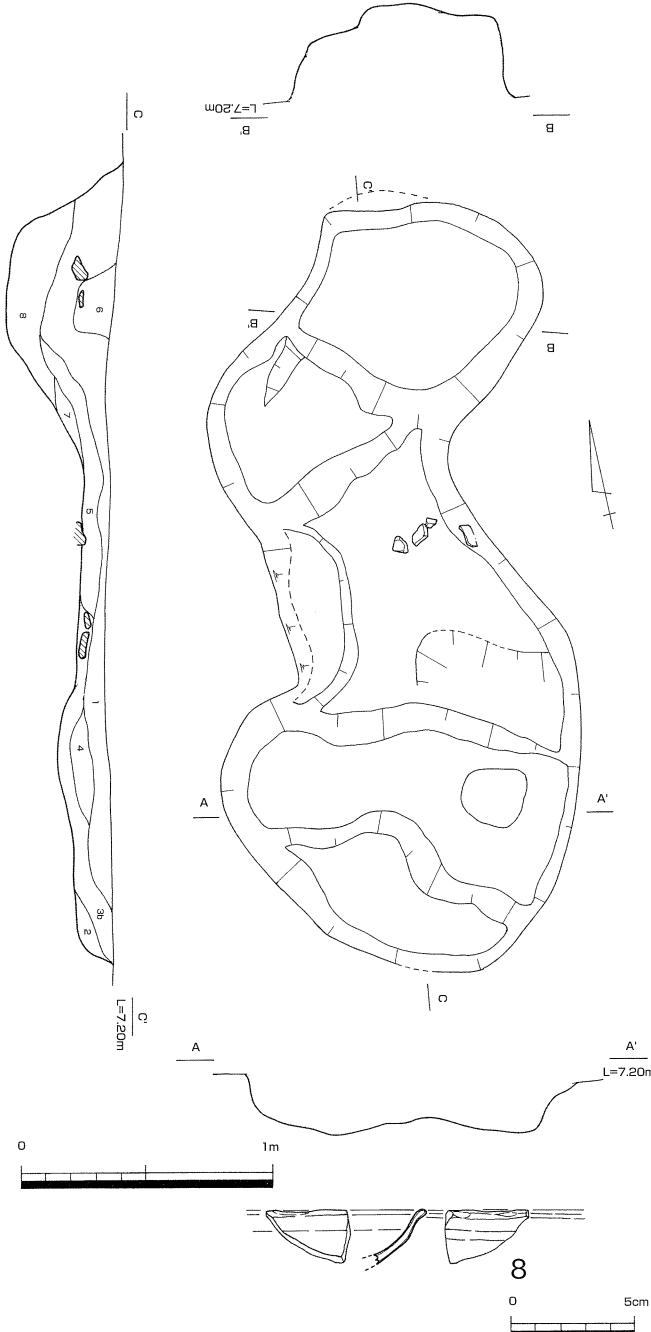
遺物は7の肥前系磁器碗が出土している。これは上層から出土したもので底部片である。17世紀半ば頃のもので、見込みは蛇の目釉剥ぎとし、砂の付着が僅かに認められ高台露胎である。なお、これは二次的に周囲を円形状に打ち欠いており、円盤状土製品として再利用したものといえる。

SK05

SK03・04の東側に近接してある大形の土坑である。平面形は「く」の字状に細長い不定形なものである。規模は長軸は約300cm、短軸は95～140cmを測る。主軸方向は東に13°ほど振っている。検出面からの深さは14～40cmとなっており、底面の状況は北側が深く、中ほどは浅くさらに南側も深くなっている。最も深いのは北側である。検出時において焼土の固まりとともに、埋土にも筋状の炭化物層がみられた。ただこれらは広がりをもつものではなかった。

遺物は土器小片が僅かに出土しているのみである。8は18世紀前半代の瀬戸美濃

1. 2.5Y6/2灰黄色粘質シルトに黄色小ブロック明黄褐色小粒多く含む
2. 2.5Y2/1黒色土に10YR6/1褐色土と10YR6/2灰黄褐色土の互層
3. 2.5Y6/3にぶい黄色粘質シルト。明黄褐色粒と暗褐色と暗茶の小粒多く混じる
4. 2.5Y6/1黄灰色シルト、淡黄色ブロック中量混じる
5. 2.5Y7/2灰黄色粘質シルト、明黄褐色と淡黄色ブロック多く混じる
6. 5Y6/2灰オリーブ色粘質シルト。淡黄色小粒少量混じる
7. 2.5Y7/3浅黄色粘質シルト淡黄色小粒少量混じる
8. 5Y7/2灰白色粘質シルト明黄褐色ブロック多くなる（地山由来）



第8図 S区SK05平・断面図および出土遺物

系施釉陶器皿で口縁端部は溝縁状である。

SK06

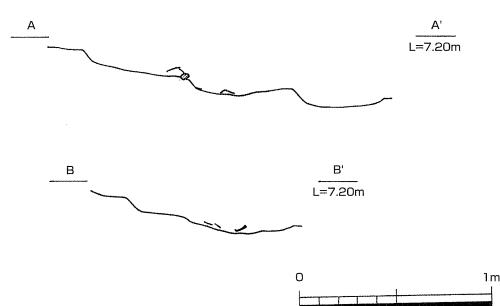
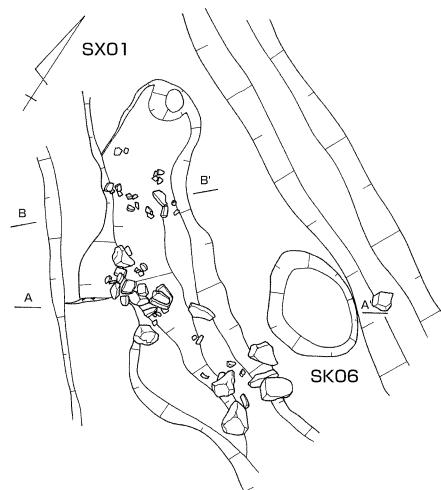
調査区北側の傾斜面において検出したものである。SD03と近接し南側は土器の集中がみられたSX01である。結果として土坑状のくぼみを取り扱ったもので、SX01と関連あることも考慮される。規模は長軸が60cmで、短軸は45cmを測る。検出面からの深さは10cm未満である。

遺物は9・10が出土している。9は18世紀後半頃の肥前系陶器刷毛目鉢の注口おもわれる。10は備前焼の壺とおもわれる。

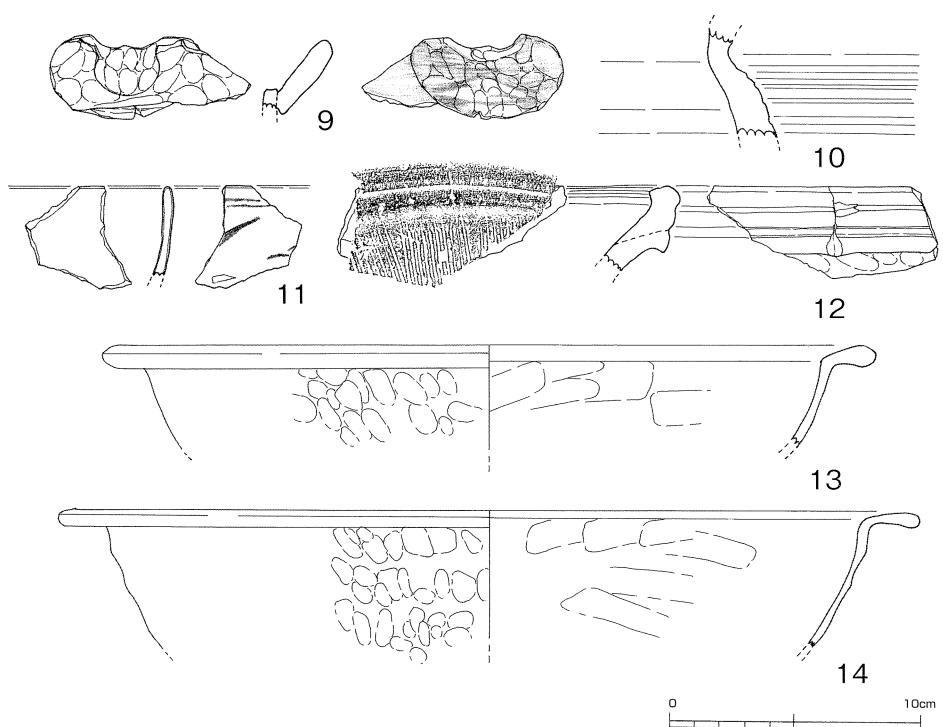
SK07

調査区北東隅で検出したもので、残り部分は北につづいているものとおもわれる。平面形はやや不整形な長楕円形を呈し、規模は長軸が約155cm、短軸は約90cmを測る。地形傾斜にそって東に低くなっている。検出面からの深さは約4～10cmを測る。

遺物は近世の土器片が僅かに出土している。



第9図 S区SK06・SX01平・断面図



第10図 S区SK06・SX01出土遺物

SK08

SK07の南西側に近接してある土坑で、平面形は長楕円形を呈している。規模は長軸が約110cm、短軸は約45cmを測る。長軸方向は約55°東に振っている。検出面からの深さは2~5cmとなっており、西側が一段深くなっている。

なお、遺物は出土していない。

SK09

調査区中ほど西よりで検出したものである。平面形は小判形を呈するもので、規模は長軸が80cm、短軸が60cmを測る。長軸方向は約31°東に振っている。検出面からの深さは約15cmで、掘形は箱形を呈している。

なお、遺物は出土していない。

SK10

調査区東壁際のやや南よりに位置するもので、SD04と近接する。平面形は不整な楕円形を呈している。規模は長軸が約82cm、短軸が約70cmを測るものである。検出面からの深さは数cmほどと浅いもので、やや西側が深くなっている。

なお、遺物は出土していない。

SK11

調査区東壁際中ほどで検出されたもので、大半は調査区外につづくものとおもわれる。平面形は不整な矩形に小溝状のものが北にのびるものである。規模は長さ約200cmを測る。検出面からの深さは5~10cmを測る。

なお、遺物は出土していない。

SK12

調査区南東隅の壁際で検出したもので、SK11と同じく東半分は調査区外につづくものである。平面形は長楕円形であるが山状な不整なものとなっている。規模は長軸が約140cmを測り、検出面からの深さは5~18cmで南側が深くなっている。

なお、遺物は出土していない。

(3) 不明遺構

SX01

調査区北側に位置するものでSD03・SK06の南側に位置し、ちょうど二次堆積土と地山の層界際の傾斜に所在する。精査時からこのあたりより土器の出土が認められていたが、遺構として明確にはできず、地山面まで掘り下げたものである。底面の状況では南より緩やかな段となり、さらに僅かなくぼみをもつ溝状のものが1mばかり伸びているものである。底面での遺物出土状況は小片となつた状態で、数個の礫とともに出土している。南側検出面の高さから傾斜に沿うように所在していたとおもわれる。確認できる土層断面からはSD03とも前後関係含め、広がりは不明である。

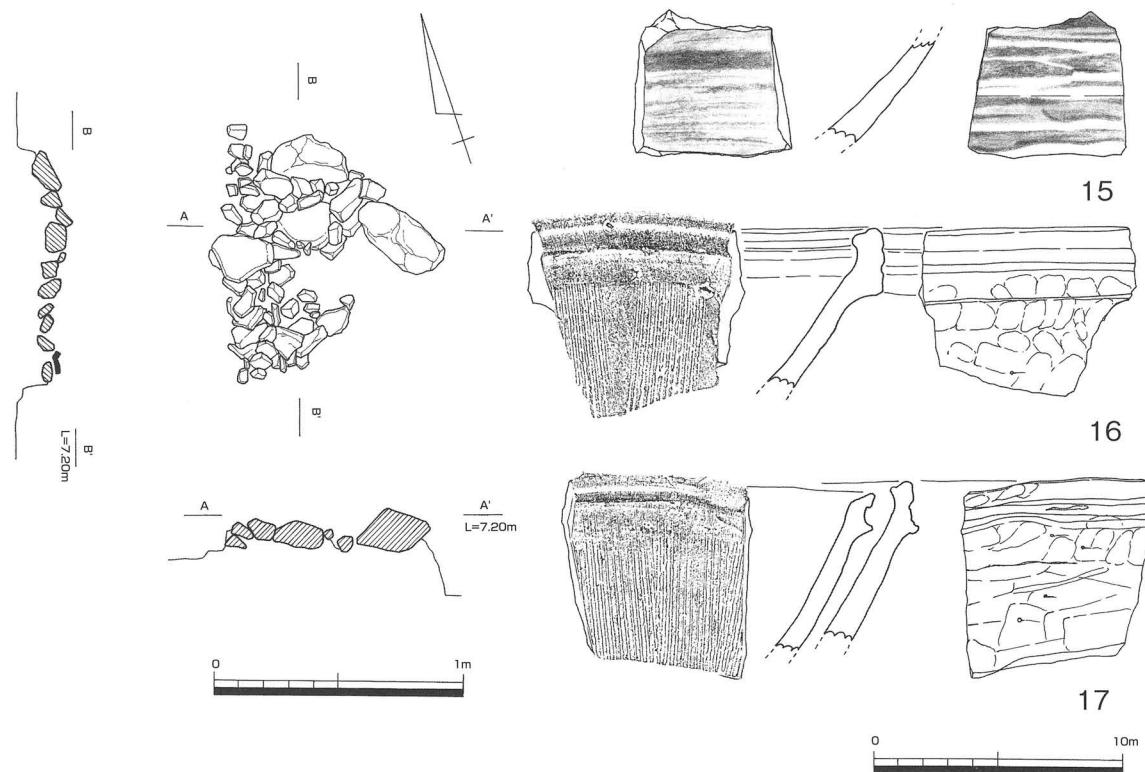
出土した遺物は底面にて確認できたものを図示している。11は肥前系陶胎染付碗の口縁部である。12は堺・明石焼系擂鉢である。18世紀前半から半ばにかけてである。13・14は土師質土器焙烙

である。口縁部は水平かやや下方するもので、18世紀前半ころとおもわれる。

SX02

調査区東壁際の中程にて検出したものである。二次堆積土の掘り下げ時に確認したもので、小児頭大から拳大の礫からなる小規模な集石である。掘形は明確にできず地山面よりはやや浮いた状況であった。主体となるのは拳大の礫で、小児頭大のものは4・5個混じるものである。この小児頭大のものについては、配置などに何らかの規則性みたいなものは看取されなかった。他にも関連遺構などは見あたらず、廃棄されたものとおもわれる。

遺物は礫に混じって15～17などが出土している。15は刷毛目をもつ肥前系陶器でSK06出土の9と接合する。16は堺・明石焼系擂鉢で、18世紀前半から半ばにかけてである。17も同様で18世紀後半のものである。16は暗紫色を呈し、17は薄手で赤褐色を呈する。



第11図 S区SX02平・断面図および出土遺物

(4) 溝

SD01

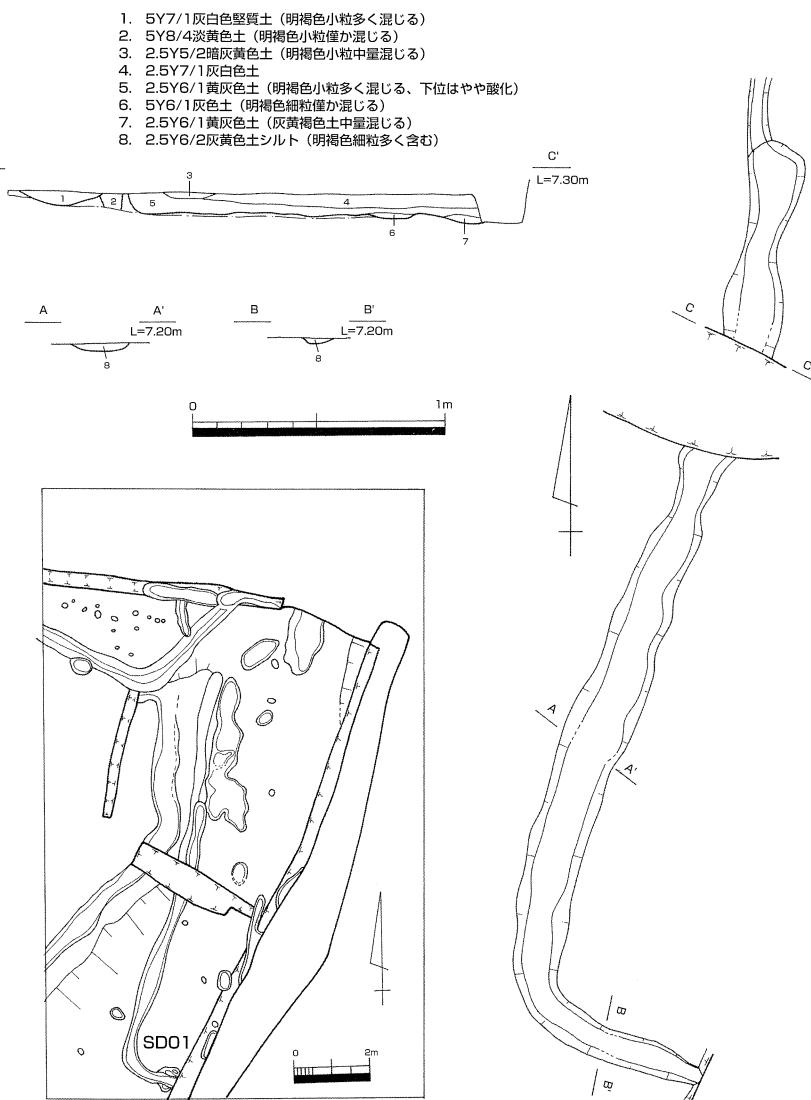
これは遺構配置図には記していないが、調査開始時において調査区東側の二次堆積土上を遺構面とする溝である。検出したのは調査区東壁から北西に約1.5m延び、そこから北東方向に屈曲して約7m延伸するものである。溝の幅は30～40cmで、検出面からの深さは6～10cmを測る。溝底の標高ではおおよそ北から南にかけて低くなっている。

なお、遺物は出土していない。

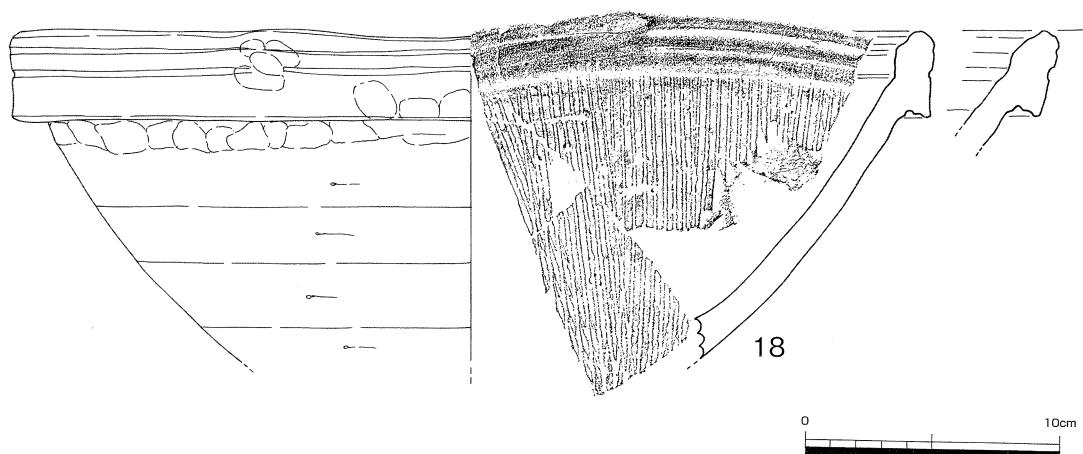
SD02

調査区の東よりにて、二次堆積土との層界ちかくを屈曲した南北方向にのびているものである。南端より北東方向に7mほど延び、北方向に変化している。北端については十分に確認できなかったものである。幅は20~60cmを測り、検出面からの深さでは北側がやや低くなっている。

遺物は北側で擂鉢や土師質土器が礫とともに数点出土している。図示した18は堺・明石焼系擂鉢で、18世紀後半頃のものとおもわれる。



第12図 S区SD01平・断面図



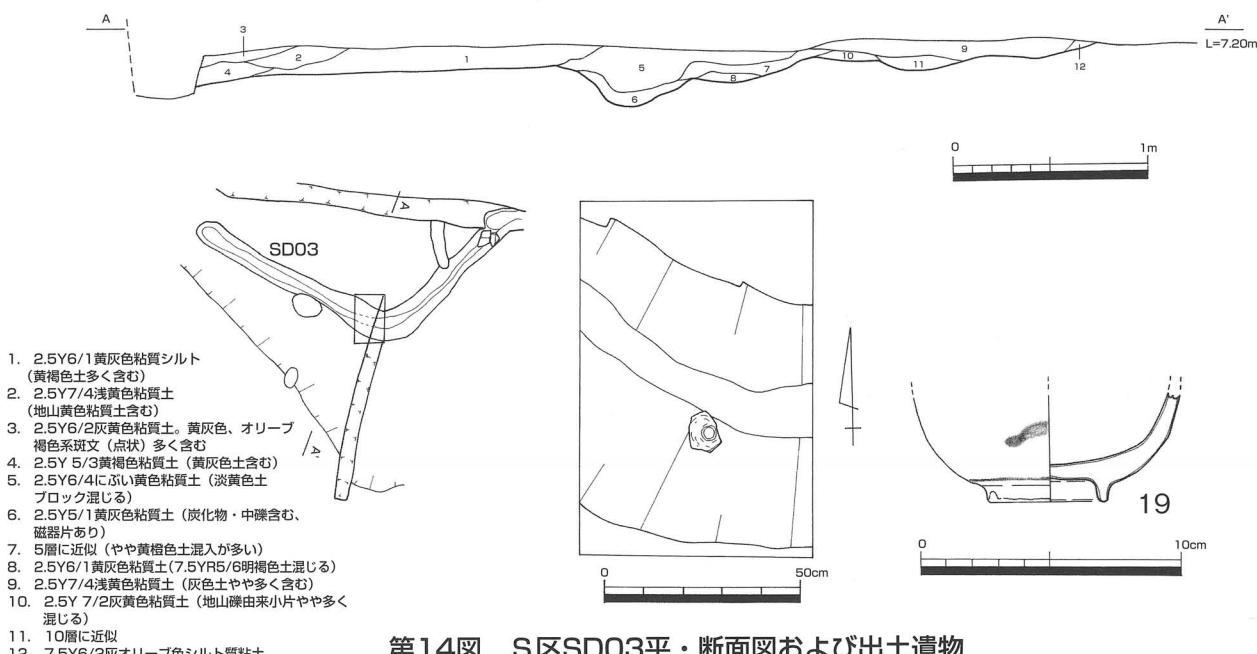
第13図 S区SD02出土遺物

SD03

調査区北側にて検出したものである。機械掘削後の精査では明確な掘形は確認できず、地山面付近まで掘り下げて底面の掘形を検出したものである。南北における断面土層では、すでに上面は削平されており、北側にかけても後からの掘り込みがみられる。他方で南側では僅かに掘形とする立ち上がりがみられ、溝底から幅にして70cmほどを測る段状を呈するものである。このようにみれば当初のSD03は検出し得たものより広いものであったと想定される。

SD03は平面形でみると「く」の字を呈するものである。北西方向から5mほど延び、直角くらいに変化して北東方向に延びる。また、北東端ちかくでは北西方向の浅い溝が取り付いている。北端は排水トレンチのため確認が十分とはいえないもので、トレンチ底面で長楕円状の掘り込みが東西につづいているものであった。溝とのつながりについてははっきりとしない。溝底の高さは北西から東にかけて低くなっている。また溝底の土層は還元色のもので、さほど流れはなかったものとおもわれる。溝内からの遺物の出土は僅少であるとともに、北東端では角礫が数点みられた。

図示できたのは19の陶胎染付碗のみである。高台周りを残すのみでややくぐもった染付である。腰部には圈線をめぐらしている。高台端は露胎で砂が付着している。18世紀前半とおもわれる。



第14図 S区SD03平・断面図および出土遺物

SD04

調査区南西隅のやや北で検出したものである。当初は西側にあるU字状のみであったが、東側を地山面まで掘り下げたところ。東側へのつづきを確認したものである。平面形は横に倒れた「し」の字を呈するものである。溝の幅は20~40cmで、検出面からの深さは3~10cmを測り、溝底の標高は西側の屈曲しているあたりが最も高くなっている。それぞれ東端に向けて低くなっている。

なお、遺物は出土していない。

SD05

調査区北西隅にて検出したものでSD06と平行して北東?南西方向に延びるものである。その南西部は掘り下げすぎたことによって不明であるが、そう長くはなかったものとおもわれる。幅は約

50～90cmで南側が広くなっている。溝底の標高は数cmであるが北が低くなっている。

なお、遺物は出土していない。

SD06

SD05の西側に近接するものである。やや西側に弧を描くように延びている。幅は約30cmである。なお、遺物は出土していない。

SD07

調査区中ほどにおいて検出したもので、SD02も西側に2m程離れてある。その南端はSK05の間際にあたり、SK01にきられつつ北東方向に延びている。その北端は北側二次堆積土の掘り込みによって削平されるものである。溝の幅は30～55cmで、溝底は北から南に向かって低くなっている。なお、遺物は出土していない。

SD08

調査区北壁際において検出したものである。サブトレーンチ掘削においてその底面近くで確認したことや、北側二次堆積土の改変範囲にあたることもあり、上部については不詳である。溝はおむね東西方向に延びているもので、東端は細く途切れ、西端は不明確であるが分岐するよう、一方は広がりをもちらん北西方向に変化をみせる。幅は30cm前後で、溝底は東側より西側にかけて低くなっている。

なお、遺物は出土していない。

SD09

調査区南西隅付近で検出したものである。長さは約200cmを測りL字状に変化している。検出した幅は約20cmであるが掘り下げすぎのため、本来はもっと広かったものである。埋土は灰色土である。

なお、遺物は出土していない。

(5) 柱穴

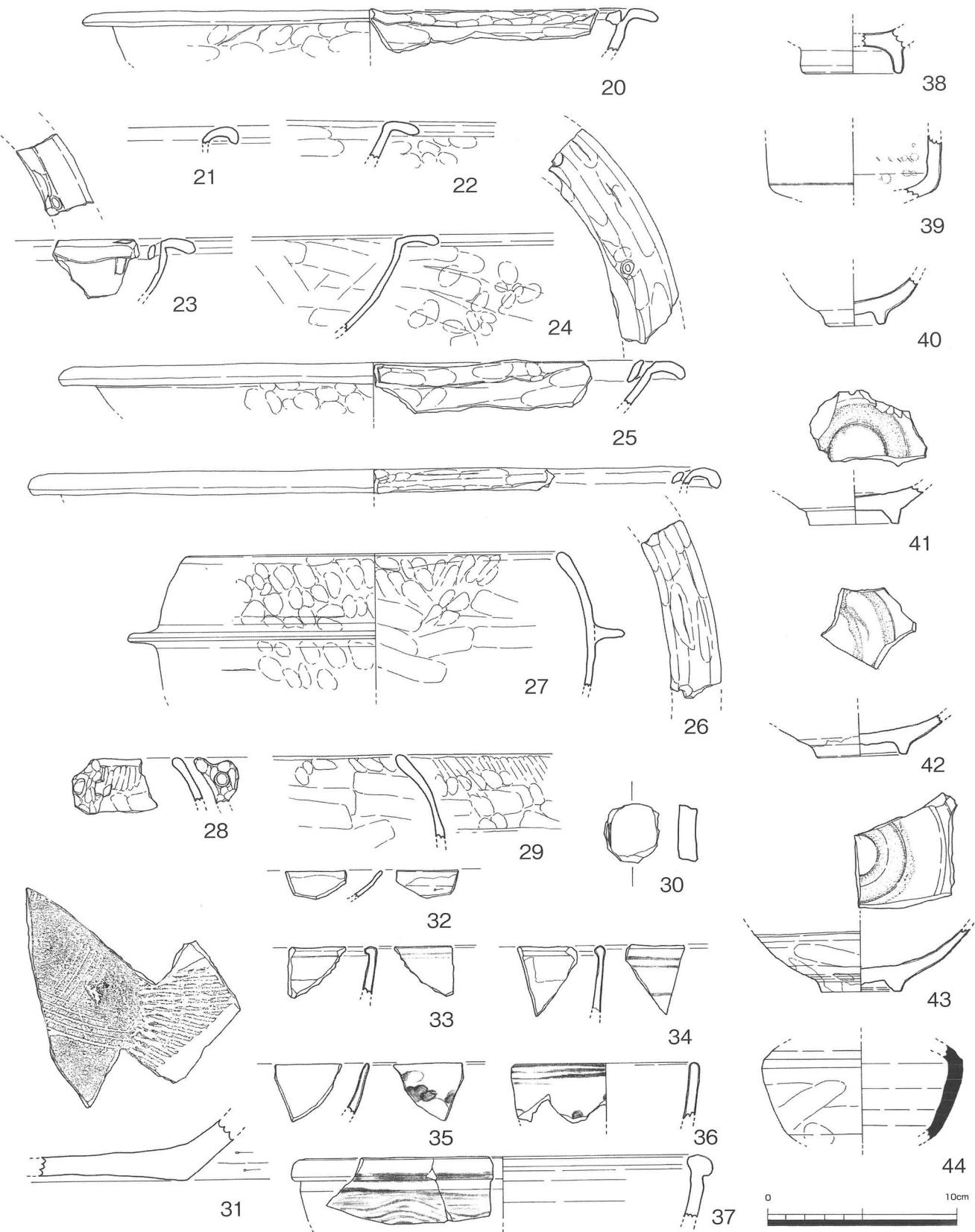
検出された柱穴は調査区北西側を中心とするもので、平面形は円形や長楕円形を呈するものが多い。また規模は20～30cm前後のものが主体で、中には50cmほどのものがみられる。埋土をみると暗灰色土・明黄色土・黄色土・黄橙色ブロック混じり灰色土・黄橙色ブロック混じり暗灰色土の5種くらいに区分できる。量的には黄橙色ブロック混じり暗灰色土・黄色土などが比較的多くみられるが、過半をしめるものではない。今回は建物跡は復元できなかったが、数棟以上の所在は想定される。

なお、遺物出土の柱穴は僅か1基のみで、土器小片が1点出土したのみである。

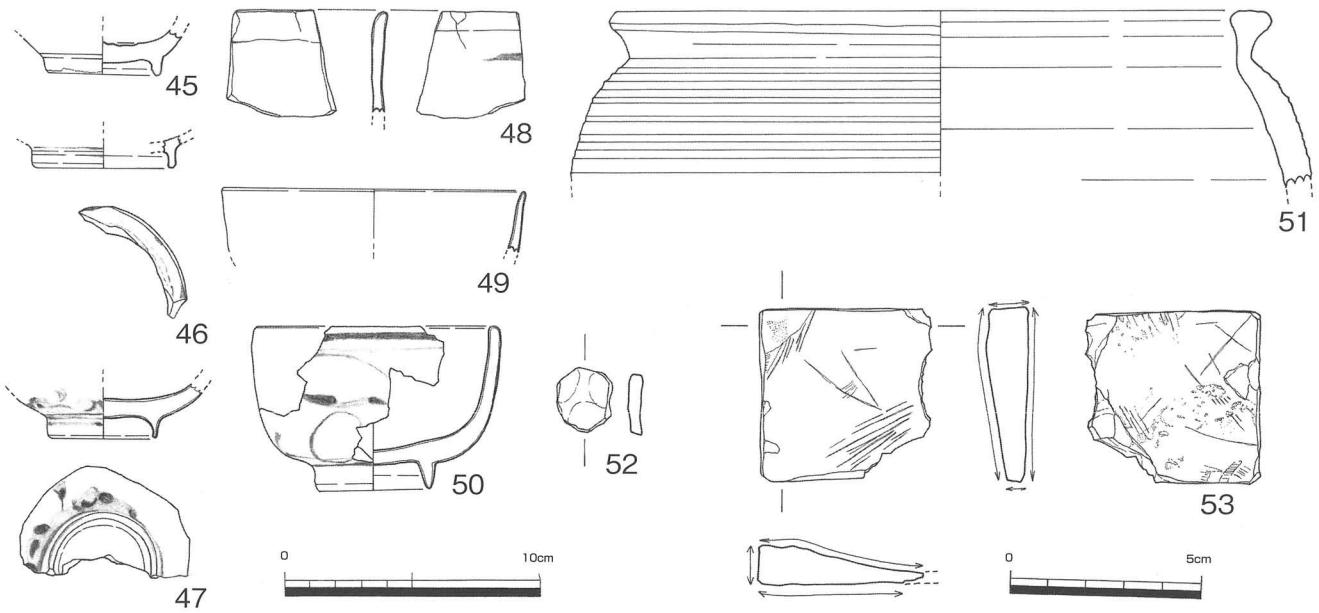
(6) その他の遺物

ここでは調査区北から東側にかけて二次堆積土の掘り下げ時に出土した遺物と、表土剥ぎなどによる遺物を図示下ものである。20・24・25・27などはSX01近くからのものである。

20～26は焙烙で破片のため同一個体片を含むものかもしれない。20・22は瓦質にちかいもので、



第15図 S区その他の遺物①



第16図 S区その他の遺物②

20の内耳は貫通するものである。他は土師質で内耳は貫通している。27～29は土師質土器羽釜で、28は貫通孔をもつ外耳である。30は肥前系陶器を再利用した円盤状土製品である。31は焼締陶器擂鉢で堺・明石焼系とおもわれ、内底面に「×」の条溝をもつ。32は備前焼灯明皿で、口縁端部内外面に炭化物が付着する。33・34は陶胎染付の火入である。35は染付の口縁部小片である。36は陶胎染付碗である。37は肥前系刷毛目鉢の口縁部である。38は肥前系施釉陶器呉器手碗で胎土はやや脆い感がある。39は35と同一個体とおもわれるものである。40～43は肥前系磁器で、41・43は見込みに蛇の目釉剥ぎに砂が付着する。40は18世紀後半か、41～43は17世紀半ば頃である。44は須恵器壺胴部片である。

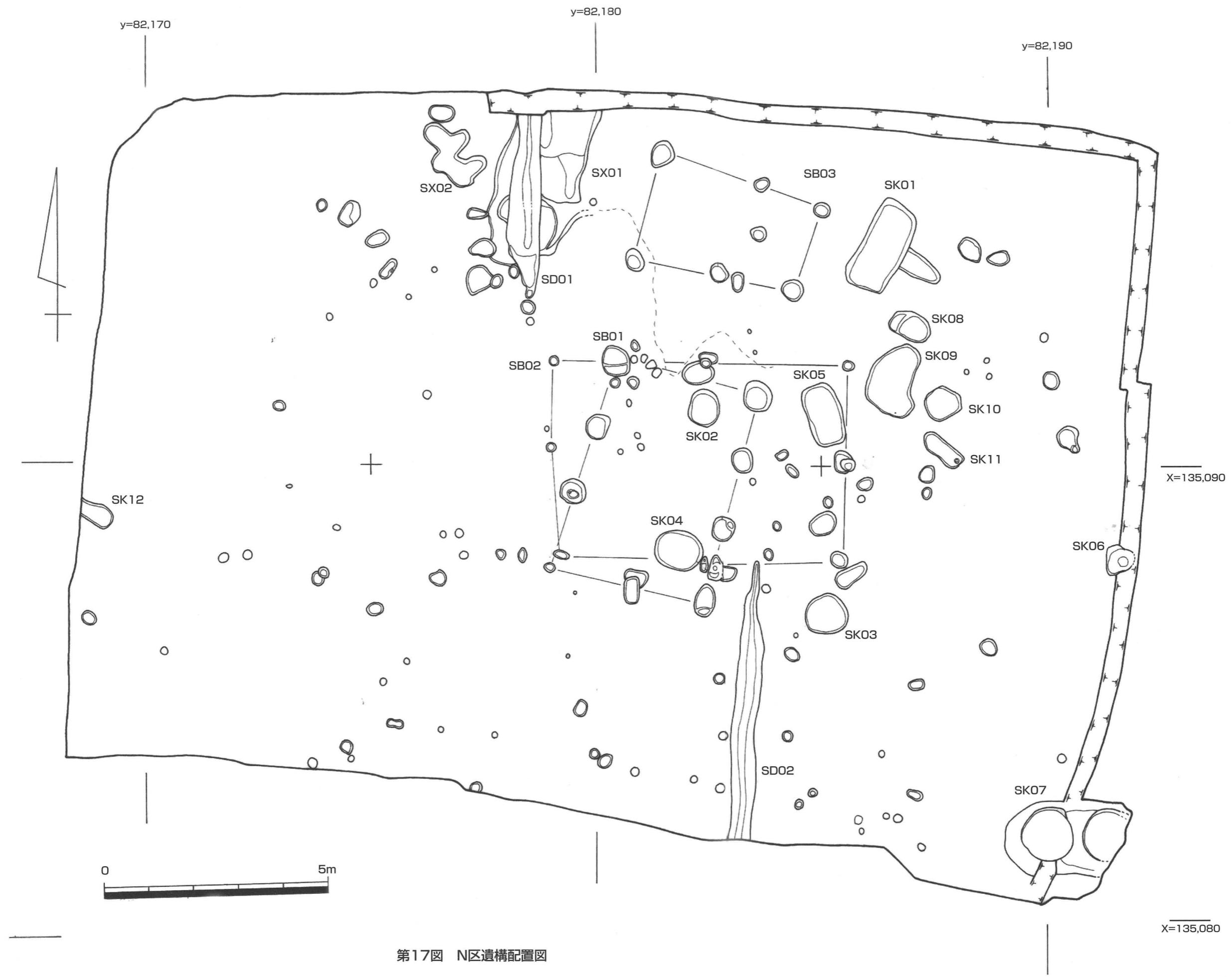
45～53は表土剥ぎ時などのもので、45は磁器瓶である。46は磁器碗の高台片である。47は染付碗である。48は陶胎染付碗で口縁端部は外反する。49は磁器碗口縁部片である。50は陶胎染付碗で、高台端は露胎で砂が付着する。51は備前系焼締陶器甕である。52は円盤状土製品で土師質土器の転用である。53は砥石である。45～51までは18世紀代のもので、49は19世紀半ばまで下るものとおもわれる。

第2節 N区について

(1) 層序

N区で検出された遺構は密度が高いものではないが、柱穴に掘立柱建物跡、土坑、溝などがある。遺構の広がりは調査区なかほどから東半にかけてで、調査区西壁際はきわめて少ない。また、南側でも小さな柱穴は点々としている程度である。S区と同様に地形改変が及んだ可能性が考慮される。

まず北壁土層をみると北東隅付近では現床土直下にあたる、標高約6.7mがS区でもみられた地山面である。この状況は調査区内の北東隅近辺をのぞいた大部分も該当する。この北東隅付近はS区と同じように二次堆積土がみられ、地山面は傾斜していくものである。北壁では北西隅より2～3mほどして地山面は傾斜していき、東半では一部を確認するにとどまる。調査区東壁でも南端では地山面は床土直下の標高約6.7mで、北に向け徐々にさがり北端で北壁とつながる。遺構検出面とする



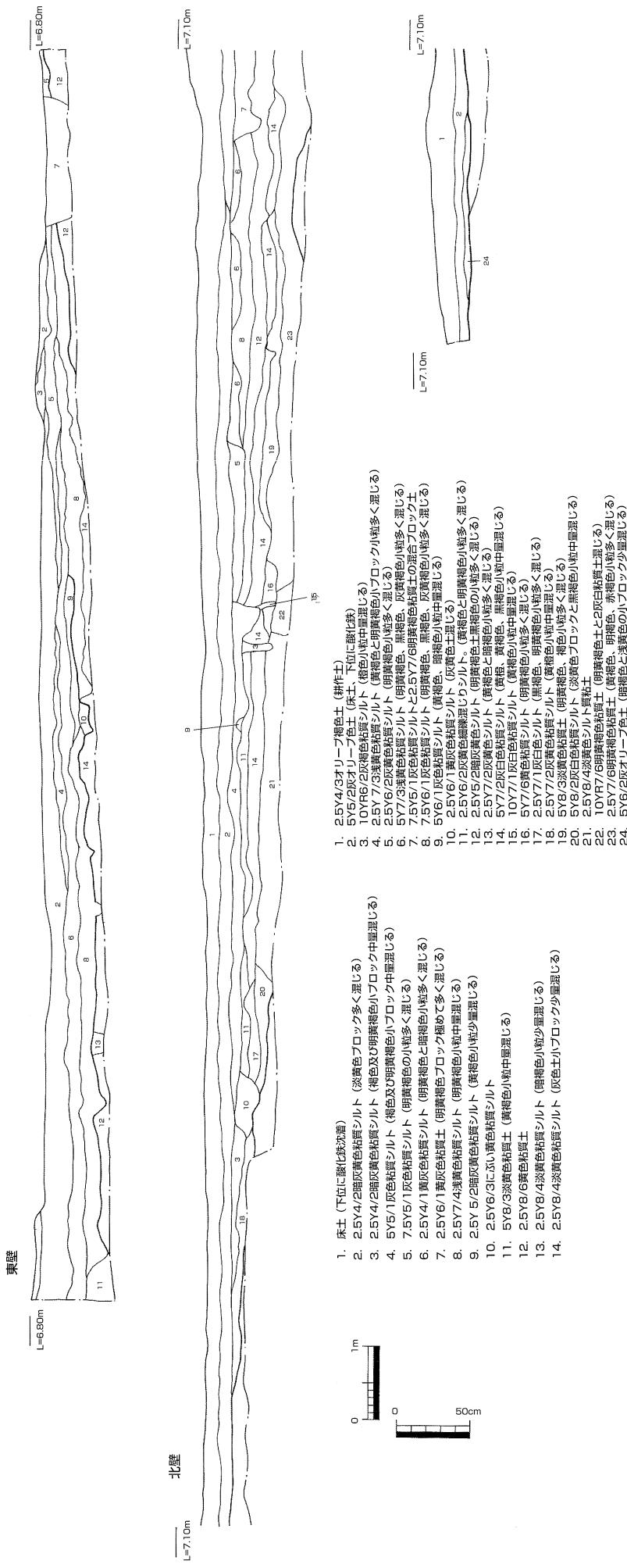
第17図 N区遺構配置図

のは基本的に地山面で、中心から北東隅にかけては一部掘り下げすぎはあったが地山直上とする淡黄色土などである。北東隅では標高約6.4mである。北東隅あたりでは遺構検出面と現床土までは約30cmあり、厚さ数cmの層が4~5枚みられる。また、北壁際では須恵器を包含する層を覆う面から溝が掘り込まれ、さらに土層がみられる。これも現況に至るまでの改変を示すものである。

(2) 土坑

SK01

調査区のやや東より北側に位置するものである。平面形は長方形であるが隅丸状で、やや不整形な感を呈するものである。長軸は約205cm、短軸は約95cmを測り、長軸方向は東に31°ほど振れるものである。深さは検出面より約15cmで、長軸方向では立ち上がりが緩く底面の状況をみると、おおむね平坦といえるが、南東隅は僅か数cmほど低くなっている。また、検出時において別の土坑との切り合い関係が認められた。この土坑はSK01の東側に所在するもので、平面形は細長い楕円形状を呈している。土層からしてSK01によって切られているものとおもわれ、長さは不明であるが幅は約55cmを測る。底面をみると東端よりは平坦であるが、西



第18図 N区東壁・北壁土層図

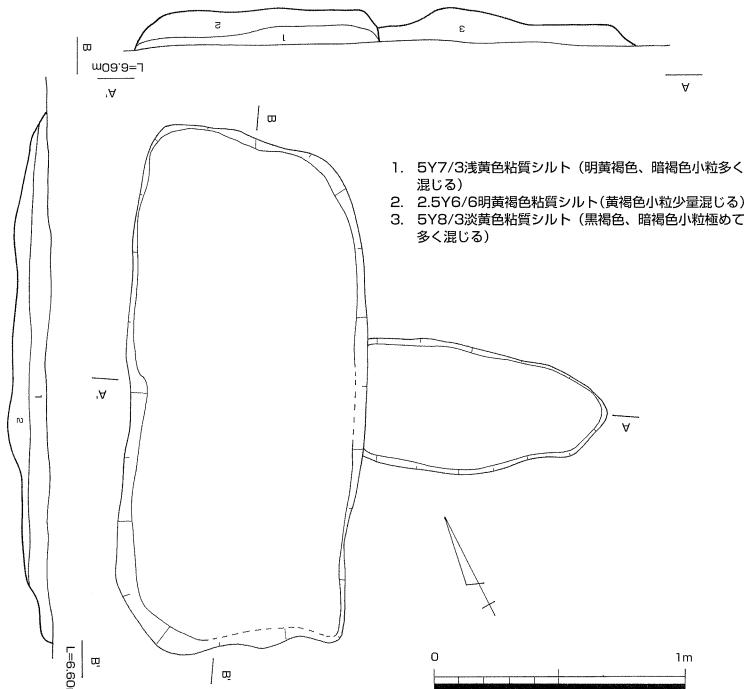
ほどではややくぼみをもつものである。

なお、遺物は出土していない。

SK02

調査区のほぼ中央において、SB01北辺に接するように所在するものである。平面形をみるとおおむね円形にちかいものであるが、正円とはいかずやや不整な方形状を呈するものといえる。長軸は南北方向に約80cmで短軸は約70cmを測り、長軸方向は東に約10°振れている。検出面よりの深さはだいたい15cmほどで、底面からの立ち上がりは急なものではない。埋土をみると灰オリーブ埴土を主として黄色土ブロックが混じるものである。黄色土ブロックの割合で上下層に違いがみられる。

なお、遺物は出土していない。



第19図 N区SK01平・断面図

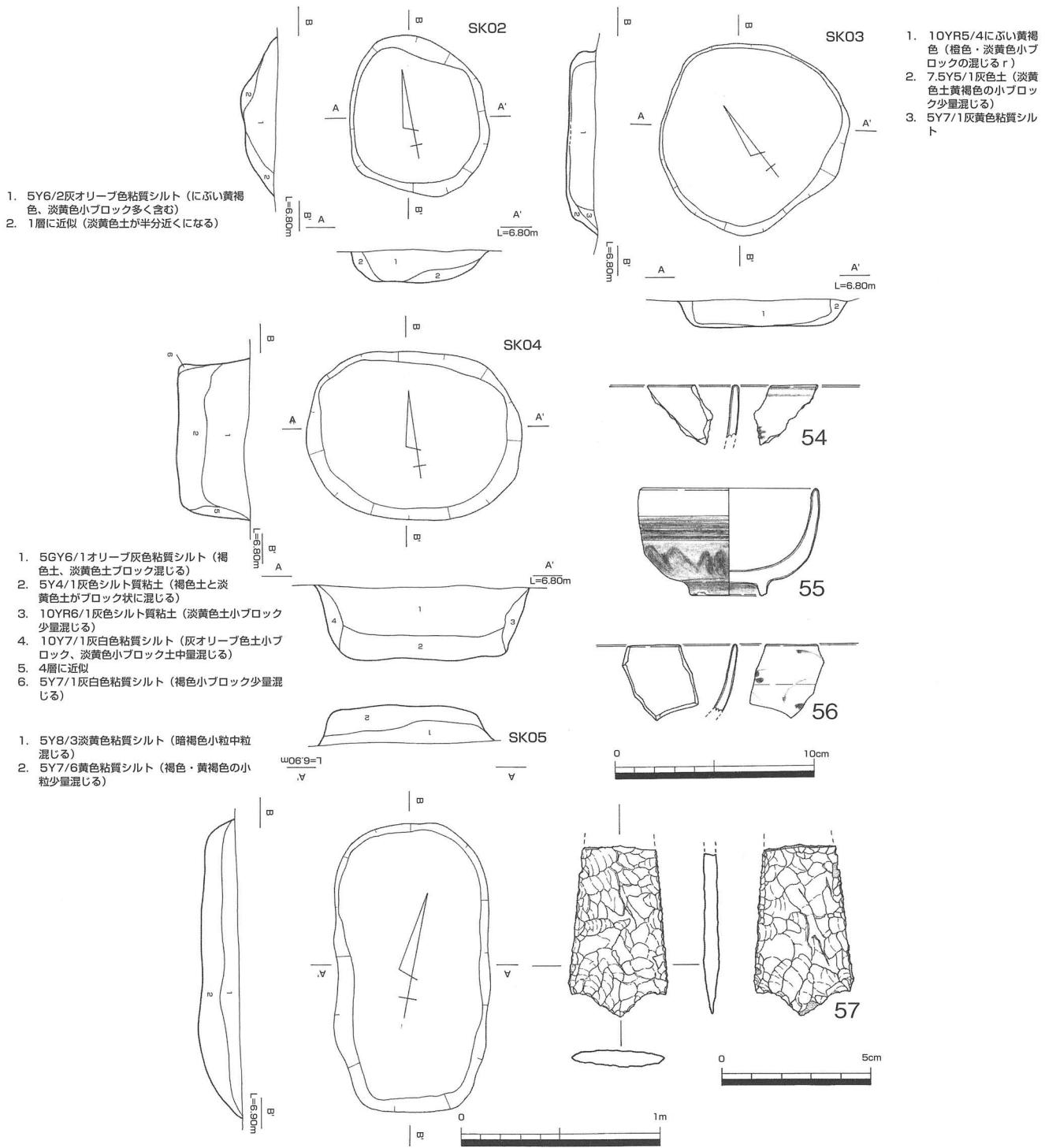
SK03

調査区のやや南東よりに位置するもので、SD02より東側に約1m離れている。平面形はSK02と同様な隅部がやや不整な円形を呈するもので、北側がわずかに突出する感がある。規模は長短でさほど差がないもので、約95cmを測るものである。深さは検出面より15cm前後のもので、底面の状況は平坦といえる。掘形の立ち上がりは底面より直上からやや斜め上方に開くものである。埋土をみると2層に区分されたもので、底面直上には灰色土が層厚1~2cmほどでみられ、これは掘形にそって同様に立ち上がるるものである。また中心の埋土は黄色土小ブロックが混じる黄褐色土となっており、断面では箱形を呈している。

遺物は54・55の土器が出土している。54は埋土より出土した陶胎染付の口縁部小片である。55は全体の半分ほどを欠くものであるが、瀬戸・美濃系陶器碗で、外面の胴には沈線を数条めぐらし、腰から高台にかけて鉄釉を花弁状に施した腰錆碗である。全体的にやや小型化しているが、扁平な感ではない。19世紀前葉ころのものとおもわれる。この碗は土坑の西端寄りの底面直上において出土したものである。

SK04

調査区の中ほどのやや南寄りに位置するもので、SK02からは南へ約2.5m、SK03からもSD02を挟んで西へ約2.5mのところである。平面形は小判形にちかい長円形を呈するもので、比較的整ったものといえる。規模は長軸をおおむね東西方向にとり約104cm、短軸は85cmを測り、主軸



第20図 N区SK02～05平・断面図および出土遺物

は西へ80°ばかり振る。検出面からの深さは35cmほどあり、他のものと比べて深いものといえる。底面の状況も平坦で、掘形の立ち上がりはかなり直上にちかいものである。埋土をみると立ち上がりの壁際に灰色系土がみられ、中ほどは灰色・褐色・黄色土がそれぞれ混じり合ったものとなっている。

遺物は埋土より56が出土している。56は染付碗口縁部小片で、外面に草花文がみられる。

SK05

調査区の中ほどに位置するもので、SK02からは東へ約2m離れている。平面形は隅丸の長方形を呈するもので、やや不整な感がみられる。規模は長軸が約145cm、短軸は約78cmを測る。ただ、北側小口と南側小口は平面形でも違いがあり、北側が緩やかな感じであるに、南側は直線的である。規模でも南側の幅は約55cmと狭いものである。また、主軸方向は西へ10°ほど振っている。検出面からの深さは20cm前後で、底面の状況はおおむね平坦である。掘形では底面から斜め上方に開くものであるが、南側では比較的緩やかなものとなっている。埋土は黄色系土を基本とし、黄灰色ブロックの混入状況によって2層に区分される。

遺物は57のサヌカイト製打製石器が出土している。これは縄文時代草創期の有舌尖頭器で土坑西側縁部近くの上層より出土したものである。上半を欠くものであるが、法量は現状でも長さ約570mm、幅は230～320mm、重さは11.7gを測る。平面形は側縁が直線的に調整された、細長の形状をなすものとおもわれる。基部は直線的であるが、中心に短く突出する平面三角形の茎部が仕上げ出されている。もともとは現状の倍ちかくあったものとおもわれる。

SK06

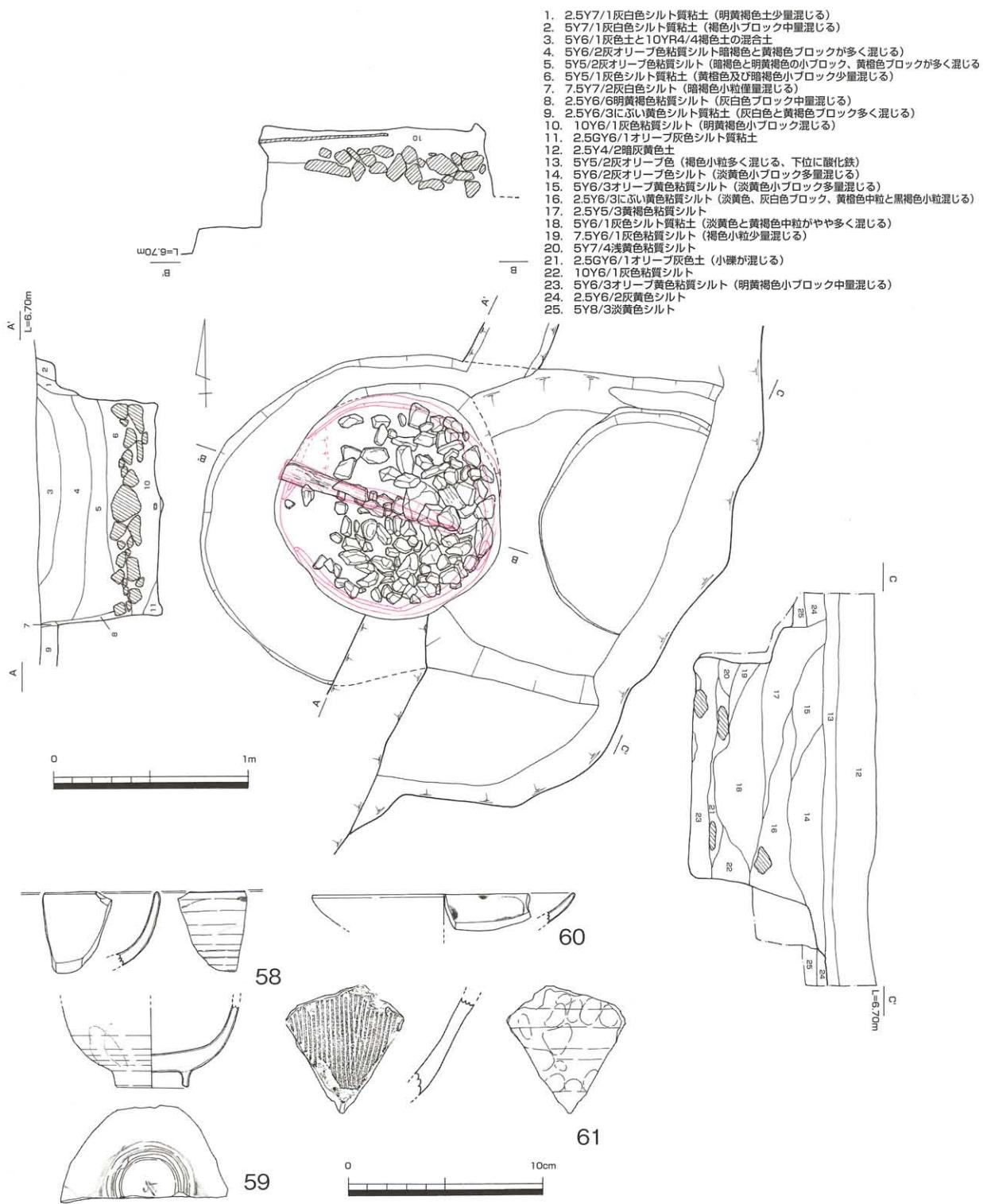
調査区東壁の中ほどに位置するもので、掘形東端は区外に及ぶものである。平面形はやや隅丸の長台形状を呈し、東側がややせばまる感じである。規模は幅が約70cmで、長さは60cmをこえる。検出面からの深さは約20cmで、底面は二段になっている。

なお、遺物は出土していない。

SK07

調査区南東隅において検出されたものである。これは平面形が円形を呈する土坑が東西に2基並んだものに、その外側には一回り大きな浅い段が長楕円形状にみられるものである。ここでは全体をSK07とし2基の土坑はそれぞれ東土坑、西土坑とする。

当初調査区東壁土層において、床土直下から幅約180cmの掘り込みを確認していただけであった。ついで西土坑の一端が検出されたことから全形を確保するため調査区東壁を拡張したところ、東土坑を検出したものであった。まず西土坑の平面形は僅かに不整であるが円形を呈するもので、規模は直径が115～125cmを測り、南北方向がやや長くなっている。深さは検出面から約60cmを測る。また、検出面より40cmの深さ、底面からは20cmのところで人頭大から拳大の亜円礫や角礫などの累積が確認された。礫は東半分に多く、南東から北西にかけて重なりも少なくなっている、西側縁部までは礫が達していなかった。さらにこれら礫群の下位では底面から数cmとのところにて、板材が確認された。板材はこの一枚のみで北西から南東に向かって、長さ約900mm、幅最大110mmで先端にむけて先細になっていく。掘形の状況をみると壁の立ち上がりは垂直にちかいもので、とくに底面近くでは多少のえぐり込みされているところもある。板材もその西端では壁奥に掘り込んでいたものであった。底面はおおむね平坦といえるが、縁部には幅5cm前後の深い溝をめぐらしている。次いで南北セクションで土層をみると、西土坑は検出面まで掘形の立ち上がりが確認されたもので、一回り大きな浅いものを掘り込んだものといえる。埋土は礫群までは灰色系土で黄色ブロックが混じるものであった。礫群より下位では灰色土を主とするが還元した青味がつよいものである。なお、掘り下げを行っている時点では多少の水がみられたが、これは埋土に含有されるものかすぐに引いた。土坑も地山におさまるもので、湧水するものではないとおもわれる。



第21図 N区SK07平・断面図および出土遺物

西土坑からは58・59のような小片の土器が幾つか出土している。58は染付皿である。59は磁器碗で、高台端は露胎で砂が付着する。ともに18世紀後半頃とおもわれる。

次に東土坑であるが、西土坑との間は約20cmである。調査区を拡張したものが検出したのは3分の2ほどで、東端は調査区外に延びているものといえる。平面形は西土坑とよく似て円形基調であるが、やや不整な感を残すものである。規模は南北方向に117cmを測り、検出面からの深さは約66cmである。土坑底面の標高は約6.02mで、西土坑とほぼ同じといえる。底面の状況はこれもほぼ平坦で、掘形も直上に立ち上がるものである。なお、掘り下げていくと数個の礫はあったものの西

土坑のような礫の集中は無かったものである。また、底面ほど湿りがあったが、やはり湧水はなかった。東壁での土層をみると二段掘りになっており、上段が当初に検出していた浅い段をもつ掘り込みに相当するものといえる。ここでも床土直下から掘り込まれており、深さ 10～30 cm を測るもので東西の長さは 2 m を超えるものである。次に深掘りされているのが東土坑としたもので、上段からすると深さは 40～60 cm となる。

遺物には土器小片が僅かに出土している。60 は染付小皿で内面にやや暗みのある呉須の草花文がみられる。61 は備前焼擂鉢の胴部片である。ともに 18 世紀後半頃のものとおもわれる。

SK07 は二つの土坑に一回り大きな浅い掘り込みをもつものである。それぞれの関係について直接土坑どうしの切り合いは確認することができなかつたが、西土坑は浅い掘り込みに切り合いをもつことから後出するものといえる。東土坑と浅い掘り込みでは切り合いはみられず、規模的に不釣り合いな感もあるが、浅い掘り込みはこれに伴うものとおもわれる。ただ、結果としてかもしれないが 2 基の土坑は並置するものであり関係性が高いものとおもわれる。なお、性格については不詳であるが、両方の土坑からはコンクリートのような固まりが出ており、最終的にはごみ坑としたといえるが水留め的な用途が考慮される。

SK08

SK01 の南側約 1 m のところに位置する。平面形はやや不整な隅丸方形を呈している。規模は長さ 80 cm、幅 60 cm で長軸方向はだいたい西に 60° 振っている。検出面からの深さは約 15 cm で、西端がやや深くなっている。

なお、遺物は出土していない。

SK09

SK08 の南側すぐに近接するもので、平面形は不定形なものである。規模は長さ約 160 cm、幅約 100 cm を測り、検出面からの深さは 5～10 cm と浅いものである。

なお、遺物は出土していない。

SK10

SK09 の東側に近接するもので、平面形は不整形な台形状を呈している。規模は長さ 80 cm、幅約 70 cm を測り、検出面からの深さは 5～10 cm で南端がやや深くなっている。

なお、遺物は出土していない。

SK11

SK10 の南側に隣接するもので、平面形は隅丸長方形を呈しており、西側は丸くなっている。規模は長さが約 100 cm、幅が約 40 cm で長軸方向は西へ 47° ばかり振れている。検出面からの深さは約 5 cm と浅いものである。

なお、遺物は出土していない。

SK12

調査区西壁の中ほどに位置するもので、半分ほどの検出にとどまるものである。平面形は長方形を呈し、やや隅丸である。規模は長さが 120 cm 以上で、幅は 45 cm を測る。長軸方向は西に約 56°

振っている。検出面からの深さは約20cmで断面形は箱形を呈している。

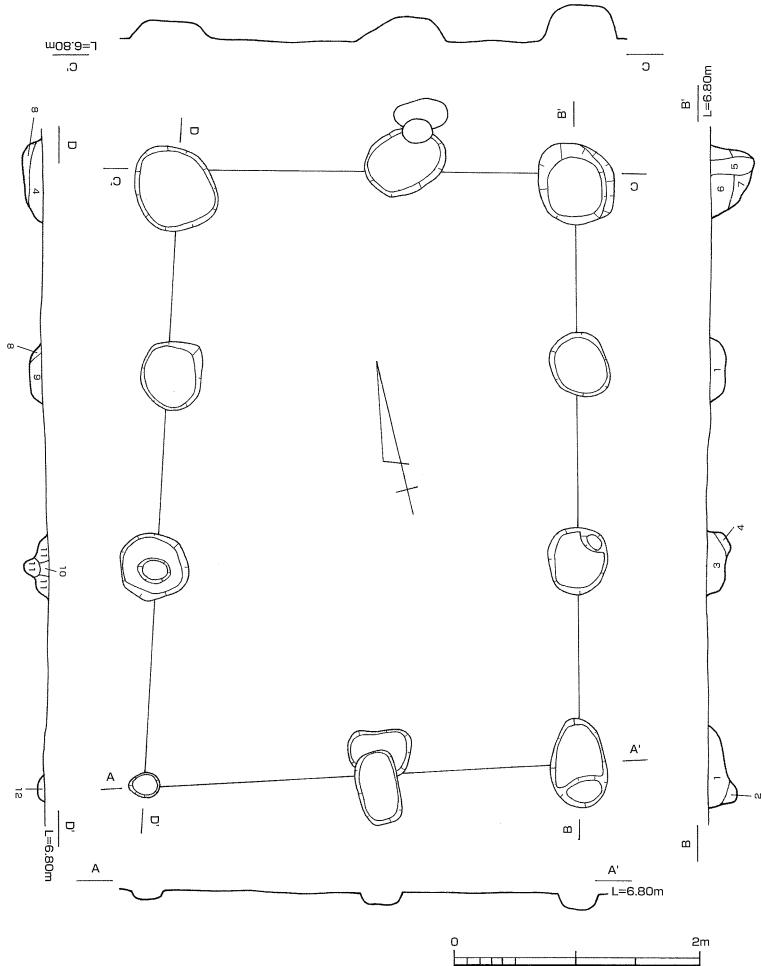
なお、遺物は出土していない。

(3) 掘立柱建物跡

SB01

調査区のほぼ中央にて検出した2間×3間の掘立柱建物跡である。桁行は約490cm、梁間約330～350cmの規模をもち、床面積は約16.7m²を測る。丘陵地傾斜方向にそった南北方向に展開するもので、主軸方向はN-15°-Eをとる。柱間距離では桁行は約150～170cmを、梁間では150～160cmと180～190cmを測る。柱穴掘形は基本的に隅丸方形または長方形を呈するもので、なかには長楕円形のものもみられる。検出面での長径は約50～70cmを測り、南西隅のものだけが小径となっている。深さは10～30cmとばらつきをみせるが、北辺のものが比較的深めのものとなっている。また、梁間中ほどどの柱穴は南北ともに切り合いまたは接近したものを持つ。北側では確実にSB02の柱穴に掘り込まれている。残る柱穴も規模的には可能性はあるが、位置的にはやや小さいものともおもわれる。

なお、遺物は出土していない。

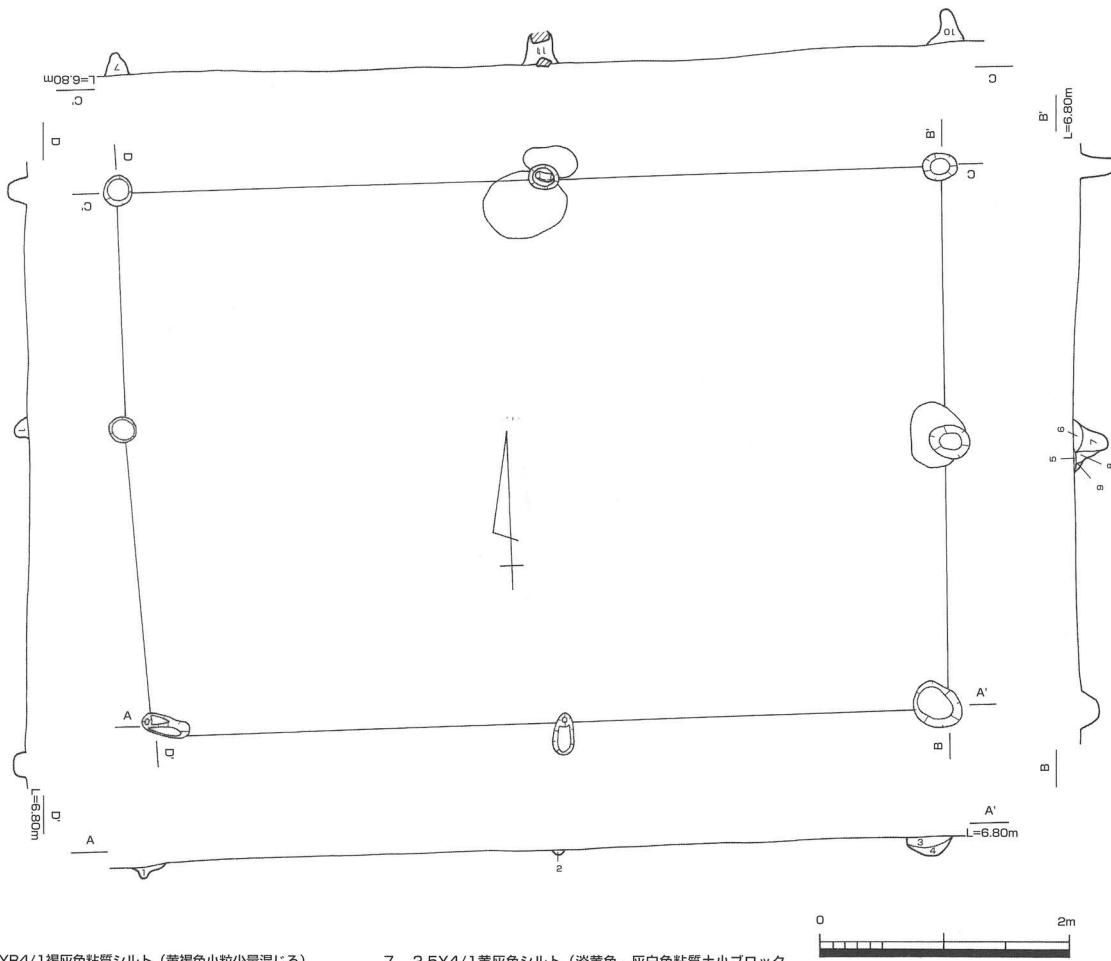


1. 5Y7/3浅黄色シルト（明黄褐色小ブロック多く混じる）
2. 10YR7/1灰白色粘質シルト（黒褐色小粒少量混じる）
3. 5Y7/2灰白色シルト（褐色小粒中量混じる）
4. 7.5Y7/2灰白色粘質シルト（褐色小粒少量と黄橙色小ブロック少量混じる）
5. 5Y7/2灰白色粘質シルト（灰色土混じる）
6. 2.5Y7/4浅黄色シルト（明黄褐色小粒中量混じる）
7. 2.5Y8/3淡黄色粘質シルト（黄橙色、青灰色小ブロック少量混じる）
8. 2.5Y7/6明黄褐色と5Y7/1灰白色土の混合土
9. 5Y7/3浅黄色粘質シルト（黄褐色小粒中量と小礫少量混じる）
10. 10YR5/1褐灰色粘質シルト（黄橙色、褐色小粒少量混じる）
11. 2.5Y8/1灰白色粘質シルト（黄橙色小粒中量混じる）
12. 2.5Y8/1灰白色シルト（黄褐色小粒中量混じる）

第22図 N区SB01平・断面図

SB02

調査区中ほどにてSB01と重複してある、2間×3間の掘立柱建物跡である。柱穴埋土が黒色土



1. 10YR4/1褐灰色粘質シルト（黄褐色小粒少量混じる）
2. 2.5Y1/1灰白色シルト（黄灰色ブロック中量混じる）
3. 10YR5/1褐灰色粘質シルト（明黄褐色小粒少量混じる）
4. 2.5Y7/4浅黄色粘質シルト（黄灰色小ブロック、黄褐色小中量混じる）
5. 2.5Y6/2灰黄色シルト（黄褐色小粒多く混じる）
6. 10YR5/1褐灰色シルト（暗褐色小ブロック、黄橙色小粒多く混じる）
7. 2.5Y4/1黄灰色シルト（淡黄色、灰白色粘質土小ブロック少量混じる）
8. 5Y4/1灰色シルト（淡黄色小ブロック中量混じる）
9. 5Y7/3浅黄色シルト（黄橙色小粒中量混じる）
10. 2.5Y3/1黒褐色（明黄褐色小ブロック僅かに混じる）
11. 2.5Y3/1黒褐色粘質シルト

第23図 N区SB02平・断面図

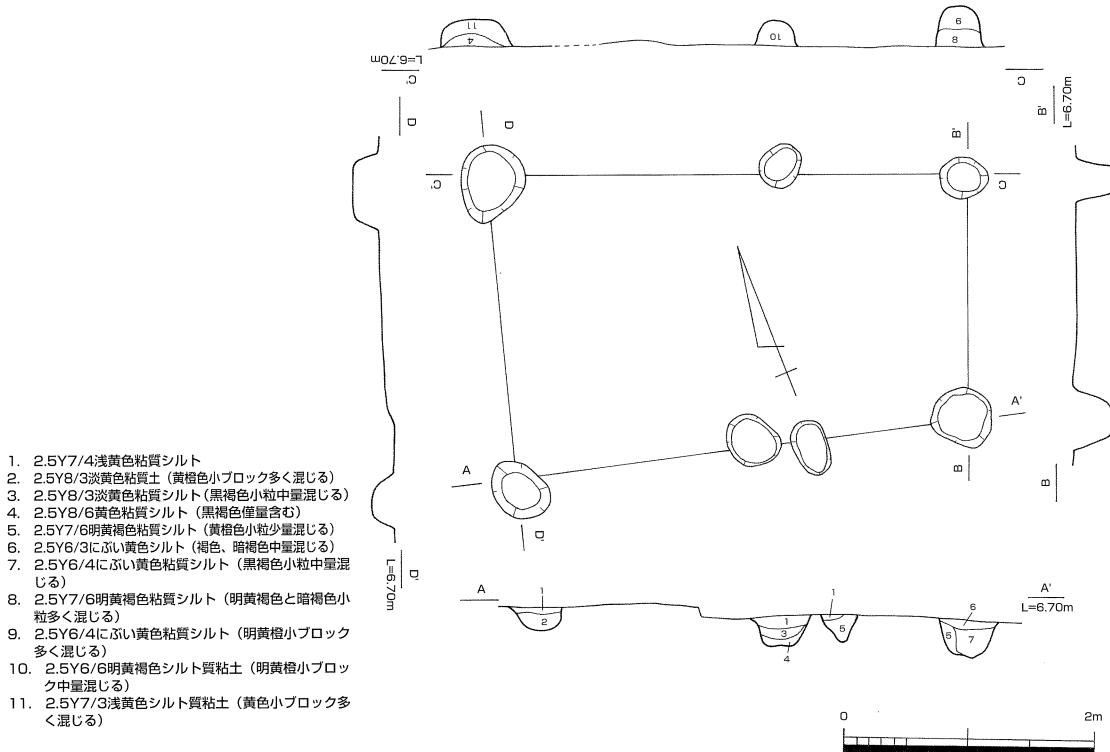
で構成されるもので、桁行は約 630 ~ 650 cm、梁間約 440 cm の規模をもち、床面積は約 28.1 m²を測る。南西隅の柱穴がやや内側に入り込んでいる。SB01 とは直交するように主軸方向をほぼ東西方向にとる。柱間距離では桁行は約 300 ~ 340 cm を、梁間では 200 cm · 220 cm 240 cm を測る。柱穴掘形は円形基調のもので、直径は 20 ~ 40 cm とそうじて規模は小さいものである。検出面での深さは 15 ~ 30 cm 前後を測る。切り合い関係より SB01 より後出するものである。

なお、遺物は出土していない。

SB03

調査区の中心より北にあるもので、SB01 · 02 より 2 m ほど離れたところにある 1 間 × 2 間の掘立柱建物跡である。桁行は約 360 ~ 380 cm、梁間約 190 ~ 250 cm の規模をもち、床面積は約 8.1 m²を測る。梁間の間隔が東西で異なるため平面形は長台形を呈している。主軸方向は SB01 と直交するようにあり、N-73°-W をとる。柱間距離では桁行は約 300 ~ 340 cm を、梁間では 200 cm · 220 cm 240 cm を測る。柱穴掘形はやや不整形な円形または長円形のもので、直径は 30 ~ 60 cm を測る。検出面からの深さは 20 ~ 30 cm で東辺が深くなっている。

なお、遺物は出土していない。



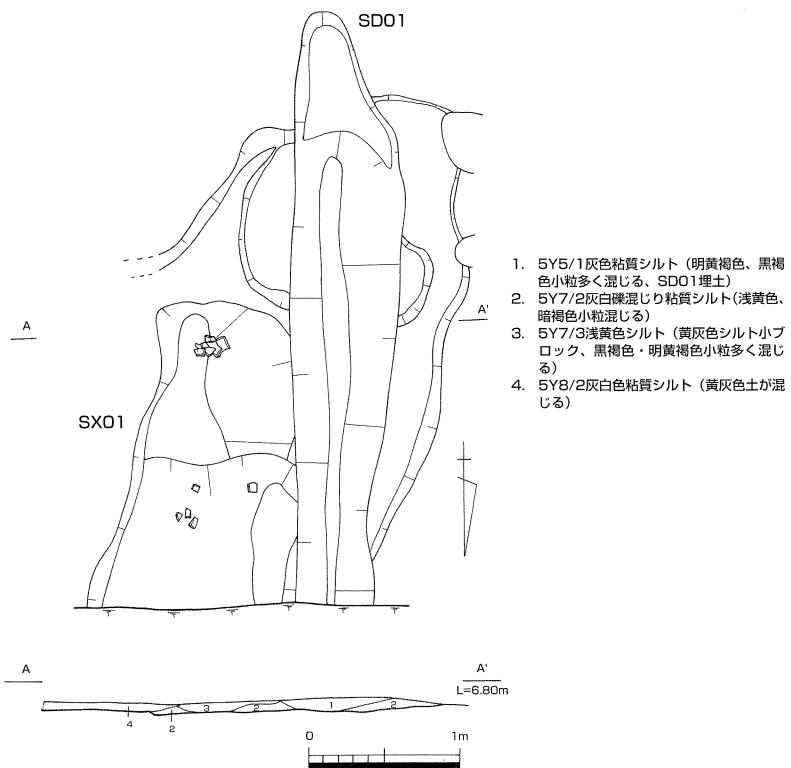
第24図 N区SB03平・断面図

(4) 溝

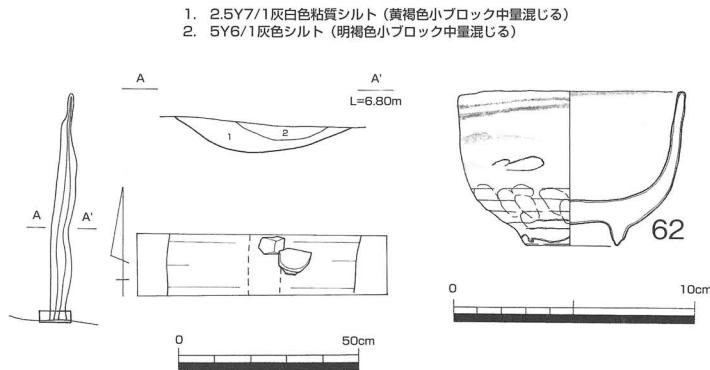
SD01

調査区やや西よりの北壁に接して検出された溝跡である。地山上に形成された堆積土を遺構面とするもので、後述する SX01 を掘り込んでいる。検出されたのは長さ約 400 cmばかりで、さらに調査区外に延伸しているものとおもわれ、走向する方向はほぼ南北方向である。幅は 50 ~ 70 cmで南側が広くなっているが、南端は三角形状にすぼまっている。検出面からの深さは最大でも 10 cm程度で、標高でみると北と南では 14 cm の比高差があり、地形に沿ったかたちで低くなっている。断面土層では溝底からの立ち上がりは緩い弧を描くものとなっており、埋土はやや黒味がかった灰色土である。

遺物には土器小片が出土している。なかには古代のものもあるが、遺構の



第25図 N区SD01・SX01平・断面図



第26図 N区SD02平・断面図および出土遺物

状況からみてこれらは混入したものとおもわれる。

SD02

調査区南壁の中ほどにて検出したもので、長さは約620cm以上を測るものである。北端は先細になり終息しているもので、最大幅は50cmほどである。検出面からの深さは最大でも約12cmで、標高では南端が6.58mを測り、北端より低くなっている。断面土層をみると掘形は緩やかな弧を描くものである。

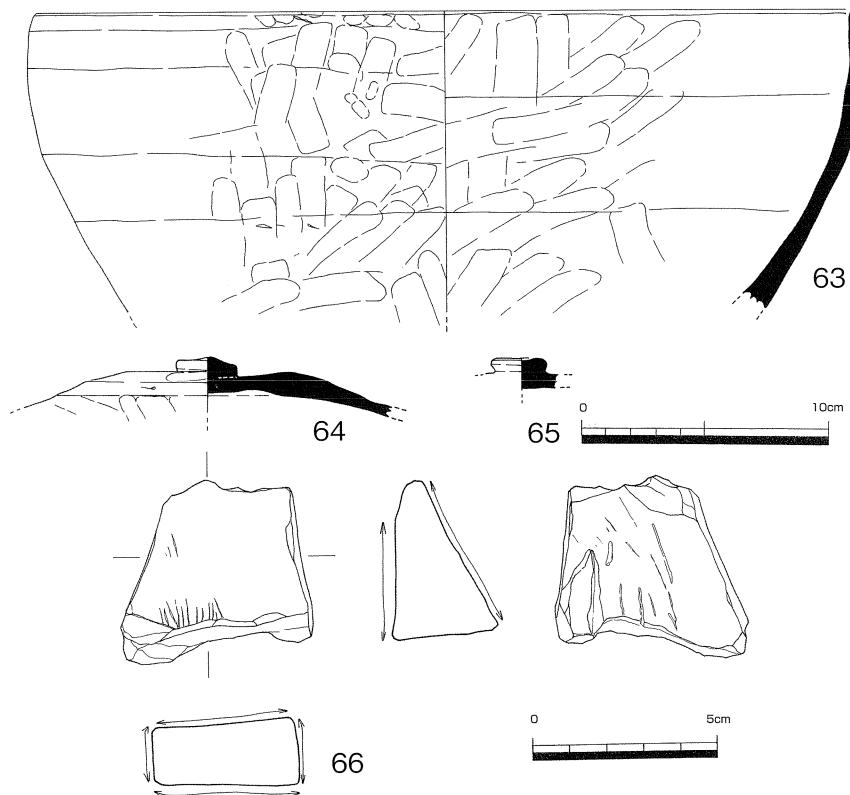
遺物は南壁沿いより62が出土している。62は陶胎染付碗で内外面とも曇った乳白色で、外面口縁端部には圈線を描いている。高台は露胎である。肥前系とするが、吉金産の可能性も考慮される。18世紀前半以降のものである。

(5) 不明遺構

SX01

SX01あたりは地形的に北東隅にかけて傾斜しており、地山上において二次堆積土がみられた西端にあたる。SX01はSD01に切られるようにしてある土坑状の掘り込みで、確認されたのは2つの不定形なものである。これらは南側に円形を呈するものがあり、この北に並んで壁際まで長方形状のものがあり、ともに地形の微傾斜に掘り込まれている。北側は長軸約140cm、短軸約105cm、深さは約10cmを測り、擂鉢状を呈するものである。埋土には炭化物が多くみられたものである。南側のものは長さが200cm以上で、幅約80～140cmを測り北側が広くなっている。深さは2～10cmほどのもので中ほどより北端にかけて僅かに深くなっていく。こちらでも埋土中に炭化物がみられたが南側のものよりは少量であった。

遺物は北側の掘り込み底面ちかくなどから63～66が出土している。また、図示したもの以外にも土師器細片なども数点出土している。63～65は須恵器で63は鉢で鉄鉢形のものである。口縁部から胴部にかけての屈曲は比較的弱く、あまり内湾しないもとおもわれる。64・65は須恵器蓋である。66は砥石で精査中に出土したもので、4面を使用している。これらのうち杯蓋は8世前半から半ばにかけてで、鉢は8世紀後半から9世紀にかけてのものとおもわれる。



第27図 N区SX01出土遺物

SX02

SX01の西側1mのところにて検出されたもので、不定形な土坑が連接したようなものである。長軸は約160cm、短軸は40～115cmを測る。検出面からの深さは約15cmである。

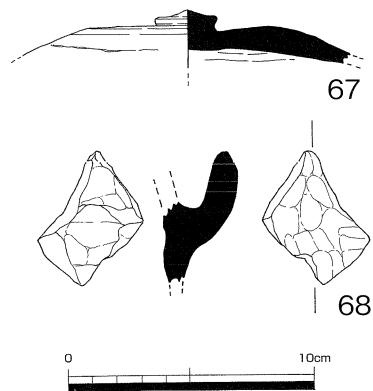
なお、遺物は出土していない。

(6) 柱穴

全体的に遺構の数はS区より少ないもので、建物跡以外の柱穴の数はさらに少ないと見える。平面形は円形のもので、規模的にも10cmくらいのものが多く、20～30cmのを含めて大勢を占める。小さなものは比較的南壁際にまとまってみられ、柵列に復元される可能性が高いものである。埋土では灰色・灰白色のものが多い。

(7) その他の遺物

ここでは表土剥ぎ時の遺物についてのものである。67は須恵器杯蓋でつまみは中央が突き出る。68は須恵器で把手とおもわれる。このほかは小片のものであるが、精査時などには弥生土器小片もみられた。



第28図 N区その他の遺物

第4章　まとめ

辺田南遺跡では掘立柱建物跡・土坑・溝などの遺構を検出したものである。遺物の量は28ℓコンテナにして3箱未満と多くはないものではある。時期的には近世が大半を占め古代などが含まれるものである。ここでは各時代の遺構遺物を簡単ではあるがまとめることにより、遺跡の歴史的変遷を跡づけることとした。

地形的な特徴からみると、両調査区とも西から南西側にかけては遺構密度がきわめて低い状況にあり、これは現況による土地改変の結果によるものといえる。調査区は当該丘陵旧地形によるところの、稜線からはやや外れた東斜面に相当するものといえ、土地利用としては東側縁部の斜面地と主要遺構が展開する西側とに区分される。

縄文時代

まず、遺跡の時期とその変遷であるが、遺物としてみれば時期的に最もさかのほるのは、N区SK05より出土している有舌尖頭器である。縄文時代草創期に比されるものであるが、出土状況からはこれに伴うものではなく混入品とおもわれる。東讃における発掘調査では初例とおもわれる。

弥生時代

次いでこれも遺物だけであるが、僅かではあるが弥生時代土器片がみられる。これらの出土状況は精査時におけるものだが、弥生時代後期後半頃のものとおもわれる。周囲の田地においても石鎌などが採取されていたことなどからや、周辺の遺跡でも鹿庭遺跡など平野に面にした丘陵地に弥生時代の遺跡がみられることなどから、弥生時代の遺跡が所在していたことが想定されるものである。ただ居住域などは見つかっておらず、小規模なものであったとおもわれる。

古代

古代の遺物はこれらも出土したのは数点であり、限られたものである。N区SX01などから須恵器蓋杯・鉄鉢のほか、S区では壺が出土している。また、SX01周辺の精査時に出土した砥石も含まれるものといえる。では遺構についてみるとSX01は不定形な掘り込みをもつもので、位置的には北から北西にかけて下る傾斜変化点際に所在するものである。性格については明確ではないが、所在状況からは地形条件に即した溝状の掘り込み、あるいはくぼみとみたい。ただ、南側にあるのは炭化物を集中して含むことから先の用途に限らないものとおもわれる。

ではこの他の遺構についてであるが、出土遺物を伴うものはなく判然としないものといえる。ただ可能性のあるものとしてN区SB01・03を想定するが、ここでは指摘するにとどめる。SB01は調査区中央に所在するもので、SB02に切り込まれた2×3間の掘立柱建物跡である。柱穴掘形は両調査区において検出した他の柱穴と比して形状・規模とも異なるものである。平面形はおおむね隅丸方形を呈し、長径は60～70cmを測るものから構成されている。SB01の北側にはSB03が所在している。やや整形なものとはいえないが、長軸方向はSB01とおおむね直交するもので、その配置において関連性が高いものといえる。

出土須恵器をみると8世紀代のものといえる。ただ8世紀代でも蓋杯などは半ば頃にかけてとおもわれるが、鉄鉢はその口縁部内湾度や胴部にかけてのカーブなどからすると、やや後出する可能性が高いものといえ、8世紀後半におさまるものと考えられる。ここで周辺の遺跡での状況をみて

みると、距離はあるが平野部を介した北向いの丘陵上に立地する川北遺跡において、古代の掘立柱建物跡群が確認されている。川北遺跡のほか東かがわ市内における当該期の主要遺跡では、8世紀のなかで前半と半ば以降に遺跡の廃絶と出現の画期が指摘されている。今回、谷筋の奥まった丘陵地に形成された本遺跡のものが、どのような性格をもつものなのかは不明確である。ただ、遺物の中に鉄鉢がみられることは特徴の一つといえるかもしれない。

近世

最後に残る検出遺構の大半を占めているのは近世である。S区・N区とも遺構に伴う出土遺物は限られるが、溝や土坑などから陶磁器の出土をみている。これらは全般的に18世紀代から19世紀初めに相当するものであり、17世紀半ば頃や後半のものが僅かに含まれている。遺構に伴うものについては、S区SD03・N区SD02などの陶胎染付碗は18世紀前半代のものとおもわれ、他の遺構出土遺物はおおむね18世紀半ばから後半頃のものといえる。また、N区SK03の腰錆碗が19世紀初めとするものである。

次に特徴的な遺構として土坑を見る。今回の調査では近世後期に比定される土坑が数基出土している。N区ではSK02～04、S区ではSK01～05などである。このうちS区SK01・02・05以外のものは微妙な違いはあるが、円形を基調とし比較的規模も似通った土坑といえるものである。遺跡においてこのような土坑は時代を問わず確認されるものであるが、その性格については不明な場合が多いものである。今回のものについても出土遺物などは僅かであり同様といえる。ただ検出状況から注意されるのがN区SK03であり、断面土層などの状況からすると桶などの使用を想定するものである。また、完存品ではないが腰錆碗の出土を底面よりみており、合わせ考えると早桶とされる円形木棺墓とみなすことができるものと考える。このような用途とすると規模的には大型に区分されるもので、成人を対象としたものといえる。なお、N区SK03と同様な観点から墓制として位置づけられるものはないが、残る土坑にもその可能性を考慮して複数基からなる墓群として捉えたい。

遺構の時期については不明確なところが残るが、遺構の検出状況などをみると切り合いや、配置の重複が多少ともみられることから複数期の変遷があったことがうかがわれる。ただ個々のものをもってつまびらかにするのは難しい。少なくとも18世紀前半代には遺跡が形成されるようになり、N区SD02・SB02などのような掘立柱建物跡に、溝が伴うようなものであったものと考える。18世紀後半代になって整地などが行われ東側縁部傾斜については、小区画の水田などとして利用されていたものといえる。その後19世紀になって一部ではあるかもしれないが、墓域が形成されたと考えるものである。

参考文献

- 長井博『辻田石垣遺跡・辻田谷川下池遺跡・鹿庭遺跡-四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第43冊-』2002 (財)香川県埋蔵文化財調査センターほか
- 古野徳久『川北遺跡・三殿出口遺跡-四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第43冊-』2004 香川県教育委員会ほか
- 蔵本晋司・真鍋昌宏・松本和彦『空港跡地遺跡VI（G地区）-空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第6冊』2003 香川県教育委員会ほか
- 佐藤竜馬・金原正明・北野信彦「高松城跡（西の丸町地区）Ⅱ」『サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第4冊』2003 香川県教育委員会ほか
- 松本和彦・陶山仁美「高松城跡（西の丸町地区）Ⅲ」『サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第5冊』2003 香川県教育委員会ほか
- 九州陶磁学会編『九州陶磁の編年』2000
- 松本和彦「四国地方-香川県」『国内出土肥前陶磁 西日本の流通をさぐる』2002
- 白神典之「堺摺鉢考」『東洋陶磁』第19号 1992
- 堀大介「鉢を模倣した須恵器について」『同志社大学歴史資料館館報』第3号 1999
- 田口哲也「近世墓の基礎研究」『博望』2号 2001
- 高畠豊「香川県」『中四国地方における旧石器時代末?縄文時代初頭における資料集成』1989 第6回中四国旧石器 文化談話会

なお、文末ではあるが今回報告書作成にあたり、近世陶磁器については松本和彦氏（香川県立ミュージアム）に、石器については小野秀幸氏（香川県立ミュージアム）に多くの教示を頂いた。記して謝意を示すものである。

遺物觀察表

出土遺物観察表

掲載番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	調査区	出土地	焼成	胎土	色調(胎土)	色調(内)	備考
1 無釉陶器	灯明皿		10.7	1.6	5.8	S区	SK01	良好	精良	10R3/4暗赤		備前焼
2 ママ	碗		—	—	S区	SK01	良好	精良		(釉)2.5Y7/2黄灰		肥前系
3 磁器	袋物		—	—	S区	SK01	良好	精良	N8/0灰白	10YR7/3鉛い黄澄	(釉)10Y6/2オーラー灰	肥前系
4 青磁	皿		11.9	—	S区	SK02	良好	精良	7.5Y8/1灰白		2.5Y7/2灰青	蛇の目釉剥ぎ
5 土師質	羽釜		—	—	S区	SK02	良好	雲母1mmの砂粒	2.5Y3/1黒褐	10YR4/3純い黄褐		(最大径)26.8
6 瓦質	羽釜		—	—	S区	SK02	良好	雲母	2.5Y6/1黄灰	2.5Y4/1黄灰		(最大径)26.6
7 磁器	皿底部		—	4.1	S区	SK04	良好		2.5Y8/1灰白			肥前系・土製円盤に転用
8 施釉陶器	皿口縁部		—	—	S区	SK05	良好	精良	N7/0灰白	(釉)10YR4/4褐～10YR2/2黒褐		瀬戸美濃系
9 施釉陶器	刷毛目鉢注口		—	—	S区	SK06	良好	精良	10R5/4赤褐	(釉)10R2/2極暗赤褐		肥前系・15㌢接合
10 烷締陶器	甕		—	—	S区	SK06	良好	精良	2.5YR4/6赤褐	5YR2/2黒褐		備前焼
11 陶胎染付	碗		—	—	S区	SX01	良好	精良	N7/0灰白			(釉)7.5Y6/1灰
12 烷締陶器	擂鉢		—	—	S区	SX01	良好	茶色粒、1mm以下の砂粒を少量含む	2.5YR5/6明赤褐			壇・明石系
13 土師質	焰焰		30.4	—	S区	SX01	良好	茶色粒、1mm以下の砂粒	7.5YR5/4鉛い褐	10YR2/1黒		壇・明石系
14 土師質	焰焰		34	—	S区	SX01	良好	1mmの砂粒を多量に含む	7.5YR5/4鉛い褐	10YR4/3純い黄褐～5YR5/6明赤褐		壇・明石系
15 施釉陶器	刷毛目鉢		—	—	S区	SX03	良好	精良	2.5YR5/4鉛い赤褐			肥前系・9㌢接合
16 烷締陶器	擂鉢		—	—	S区	SX03	良好	0.3～1.0mmの礫含む	5R4/1暗赤灰			壇・明石系
17 烷締陶器	擂鉢片口		—	—	S区	SX03	良好	1mmの砂粒を含む	2.5YR4/3鉛い赤褐			壇・明石系
18 烷締陶器	擂鉢		36.0	—	S区	SD02	良好	～3mmの砂粒	2.5YR5/6明赤褐	2.5YR5/3鉛い燈		肥前系
19 陶胎染付	碗		—	4.6	S区	SD03	良好	精良 黒い粒	2.5YR5/4鉛い燈			肥前系
20 瓦質	焰焰		30.4	—	S区		良好	精良	灰白色			
21 土師質	焰焰		—	—	S区		良好	1mm以下の砂粒含む、雲母	2.5Y5/1黄灰			
22 瓦質	焰焰		—	—	S区		良好	雲母少量	2.5Y5/2暗灰黄			御厨産か

掲載番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	調査区	出土地	焼成	胎土	色調(胎土)	色調(内)	色調(外)	備考
23	土師質	焰焰	—	—	S区	良好	精良			10YR6/2灰黄褐	10YR4/1褐灰		
24	土師質	焰焰	—	—	S区	良好	1~3mmの砂粒			7.5YR5/3鈍い褐	7.5YR3/1黒褐		
25	土師質	焰焰	33.1	—	S区	良好	1~2mmの砂粒多量 に含む			7.5YR6/3鈍い褐	10YR4/2灰黄褐~10YR3/1黒褐		
26	瓦質	焰焰	36.6	—	S区	良好	1mm以下の砂粒を やや含む	5Y5/1灰					
27	土師質	羽釜	19.8	—	S区	良好	やや精良			2.5Y7/1灰白~10YR6/2褐灰	2.5Y4/1黄灰		
28	土師質	羽釜・外耳	—	—	S区	良好	赤い粒、1mmの砂粒			10YR6/4鈍い黄澄	2.5Y6/2灰黄	(孔径)0.7	
29	土師質	羽釜	—	—	S区	良好	1mmの砂粒、赤色粒			10YR5/3鈍い黄褐	2.5Y4/1黄灰		
30	施釉陶器	土製円盤	2.9	3	1	S区	良好	精良			(上)2.5YR2/2極暗赤褐	(下)5Y7/2灰白	肥前系刷毛目鉢を転用・12.1g
31	焼締陶器	擂鉢	—	—	S区	良好	1mmの砂粒			2.5YR5/4鈍い赤褐	2.5YR5/4鈍い赤褐	堺・明石系 ワールマーク有	
32	無釉陶器	灯明皿	—	—	S区	良好	精良			2.5YR4/6赤褐			
33	陶胎染付	火入	—	—	S区	良好	精良、黒い粒	N8/0灰白		7.5YR4/4褐	(釉)7.5Y6/1灰	肥前系	
34	陶胎染付	火入	—	—	S区	良好	精良、黒い粒	N8/0灰白		7.5YR4/2灰褐	(釉)7.5Y6/1灰	肥前系	
35	染付	碗	—	—	S区	良好	精良、黒い粒	N8/0灰白					肥前系
36	陶胎染付	碗	9.9	—	S区	良好	精良	N7/0灰白					肥前系
37	施釉陶器	刷毛目鉢	—	—	S区	良好	精良	10YR5/3赤褐					肥前系
38	施釉陶器	碗	—	—	5.2	S区	良好	精良		10YR8/2灰白	鈍い澄		
39	陶胎染付	火入	—	—	S区	良好	精良	N7/0灰白					肥前系
40	磁器	碗	—	—	S区	良好	精良	N7/0灰白					肥前系
41	磁器	皿	—	—	4.7	S区	良好	精良、黒い粒	白				肥前系・土製円盤に転用 蛇の目釉剥ぎ
42	磁器	皿	—	—	4.7	S区	良好	精良	2.5Y8/1				肥前系・蛇の目釉剥ぎ
43	磁器	皿	—	—	4.3	S区	良好	精良	白				肥前系・蛇の目釉剥ぎ

掲載番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	調査区	出土地	焼成	胎土	色調(胎土)	色調(内)	色調(外)	備考
44	須恵器	壺	—	—	S区		良好	精良、黒い粒	N7/0灰白			(最大径)11.0	
45	磁器	瓶	—	—	4.3	S区		やや不良	精良	N7/0灰白	5YR7/3純い橙	5Y8/1灰白	肥前系
46	磁器	碗	—	—	5.4	S区	良好	精良	2.5Y8/1灰白				肥前系
47	染付	碗	—	—	4.3	S区	良好	精良	N8/0灰白				肥前系
48	陶胎染付	火入	—	—	S区	表土剥ぎ	良好	精良、黒い粒	N8/0灰白	7.5YR4/2灰褐	(釉)7.5Y6/1灰		肥前系
49	磁器	口縁部	13.3	—	S区	壁切り	良好	精良、黒い粒	N7/0灰白		(釉)5Y6/2灰オリーブ色		
50	陶胎染付	碗	9.5	6.3	4.3	S区		良好	精良	N7/0灰白			
51	焼締陶器	蓋	—	—	S区	表土剥ぎ	良好	精良		2.5YR4/6赤褐	5YR3/1黒褐～5YR2/1黒褐		肥前燒
52	土師質	土製円盤	2.1	2.4	0.4	S区	壁切り	良好	1mmの砂粒	(上)10YR4/1褐色	(下)10YR6/2灰黄褐		
53		砥石	(4.4)	(4.5)	0.2～1.0	S区	表土剥ぎ					3.6g	
54	陶胎染付	碗	—	—	N区	SK03	良好	精良、黒い粒	5Y7/1灰白				肥前系
55	施釉陶器	腰鑄碗	8.6	5.4	3.8	N区	SK03	良好	精良	N7/0灰白			瀬戸美濃系
56	染付	碗	—	—	N区	SK04	良好	精良	N8/0灰白				肥前系
57	サヌカイト	有舌尖頭器	(5.7)	(3.3)	(0.5)	N区	SK05					11.7g	
58	染付	碗	—	—	N区	SK07西土坑	良好	精良	N8/0灰白				肥前系
59	染付	碗	—	—	3.7	N区	SK07東土坑	良好	精良	N8/0灰白			肥前系
60	染付	皿	13.3	—	—	N区	SK07東土坑	良好	精良	N8/0灰白			肥前系
61	焼締陶器	擂鉢	—	—	—	N区	SK07東土坑	良好	精良		10R4/3赤褐	N7/0灰白	備前燒
62	陶胎染付	碗	9.2	6.4	3.8	N区	SD02	良好	精良		10YR5/4赤褐～10YR4/1褐色		肥前系もしくは吉金産か
63	須恵器	鉢鉢	33.0	—	—	N区	SX01	不良	1～2mmの砂粒		2.5Y7/2灰黄		
64	須恵器	杯蓋	—	—	6.6	N区		良好	精良	5Y8/1灰白			
65	須恵器	杯蓋	—	—	—	N区		不良	精良、黒い粒	5Y7/1灰白			

掲載番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	調査区	出土地	焼成	胎土	色調(胎土)	色調(内)	色調(外)	備考
66	砥石	(4.5)	(5.2)	1.1~2.8	N区								66.1g
67	須恵器 杯蓋	—	—	7.8	N区	表土剥ぎ	良好	精良		2.5Y7/2灰黄			
68	須恵器 把手	(5.3)	(4)	N区	表土剥ぎ	やや不良	精良、黒い粒	5Y7/1灰白					

写 真 図 版

図版1



S区発掘調査作業状況

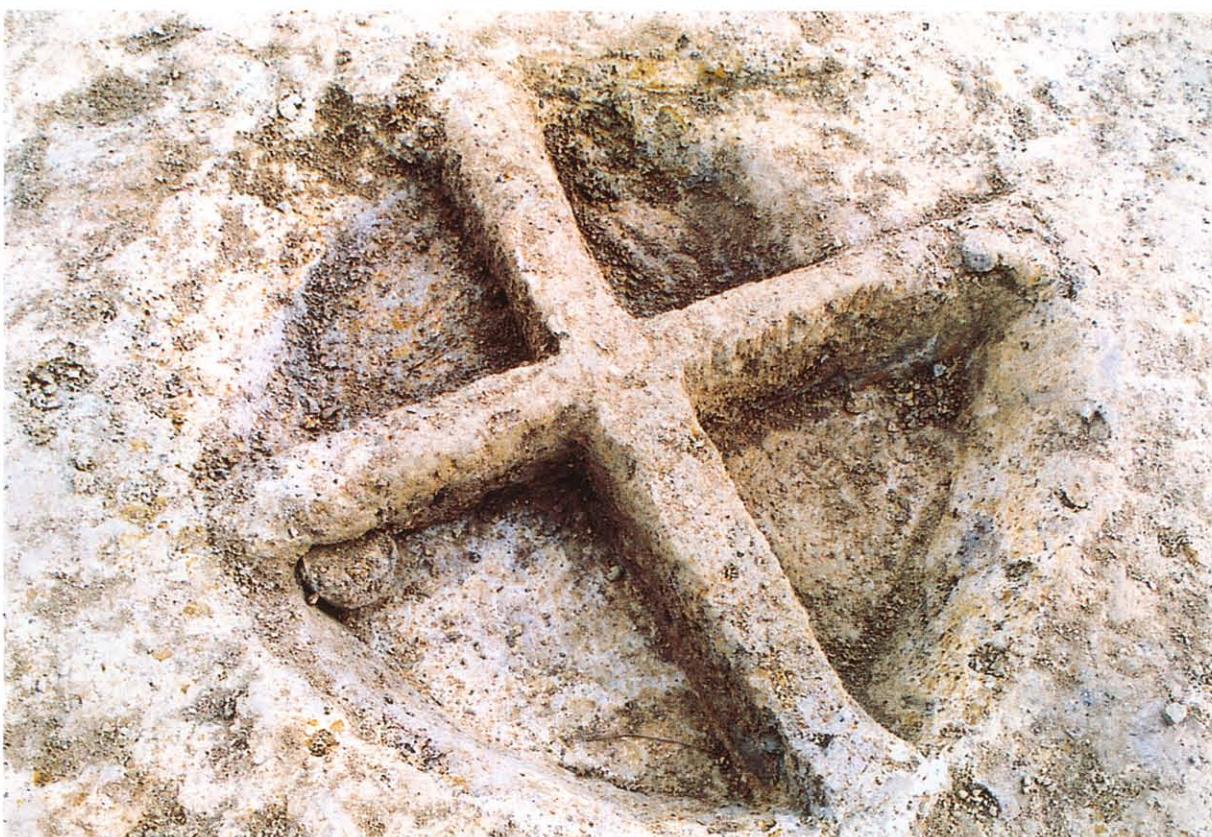


S区SK01断面土層

図版2



N区遺構検出状況



N区SK03調査状況

図版3



S区遺構検出状況

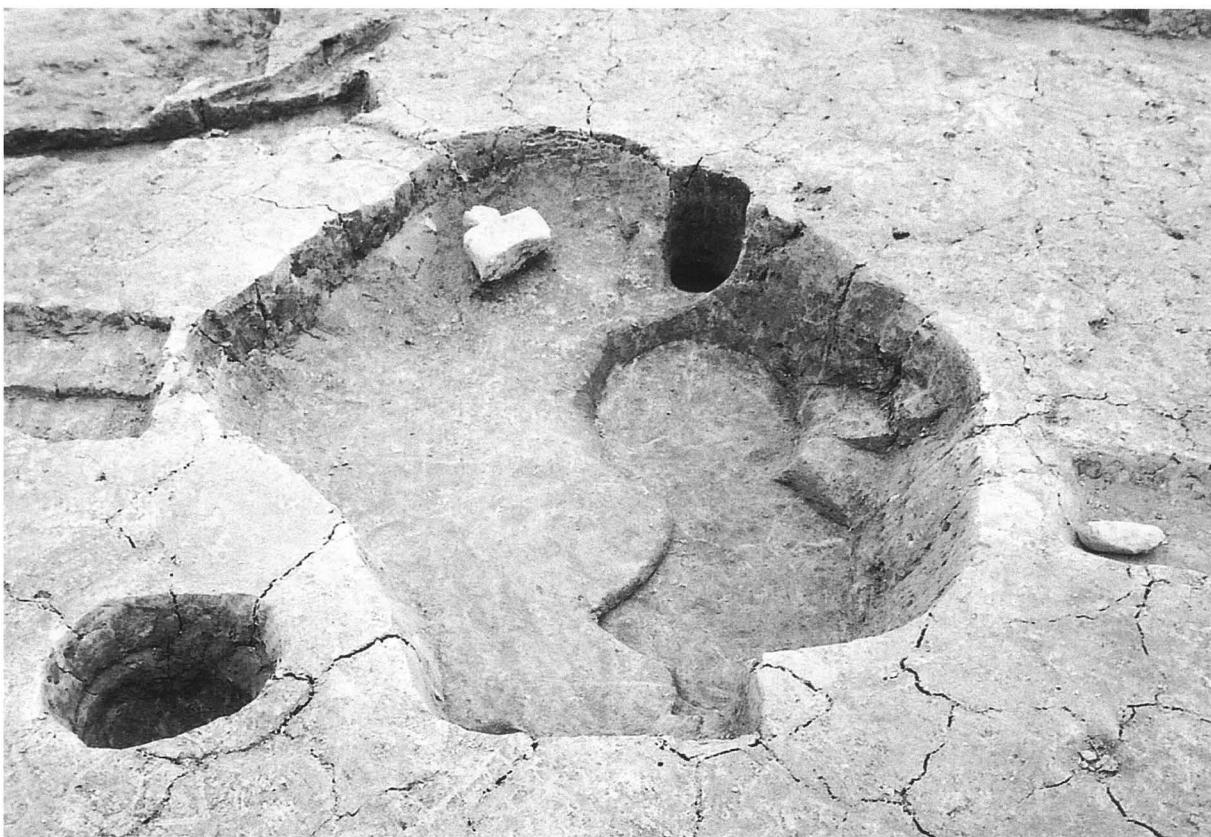


S区遺構完掘状況（北東から）

図版4



S区遺構完掘状況（南東から）



S区SK01完掘状況

図版5



S区SK03完掘状況



S区SK04遺物出土状況

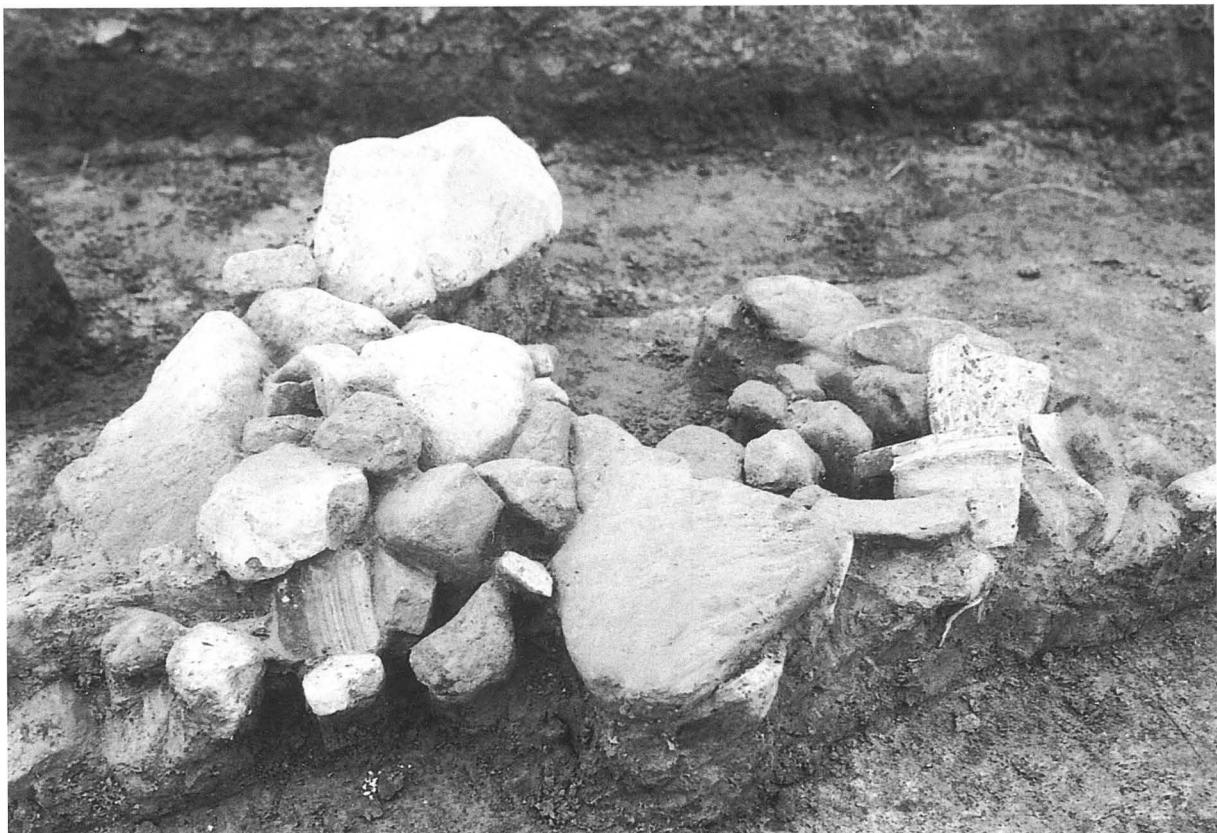
図版6



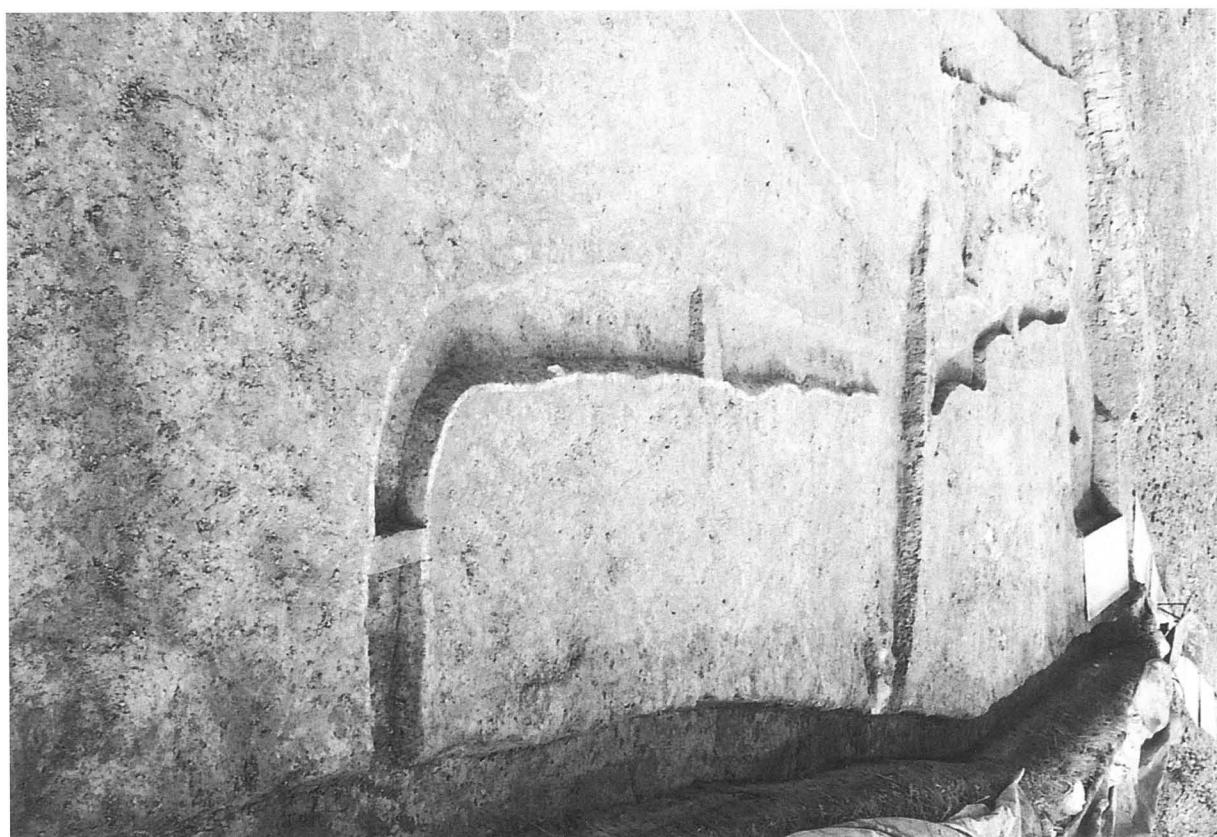
S区SK05完掘状況



S区SK06・SX01検出状況

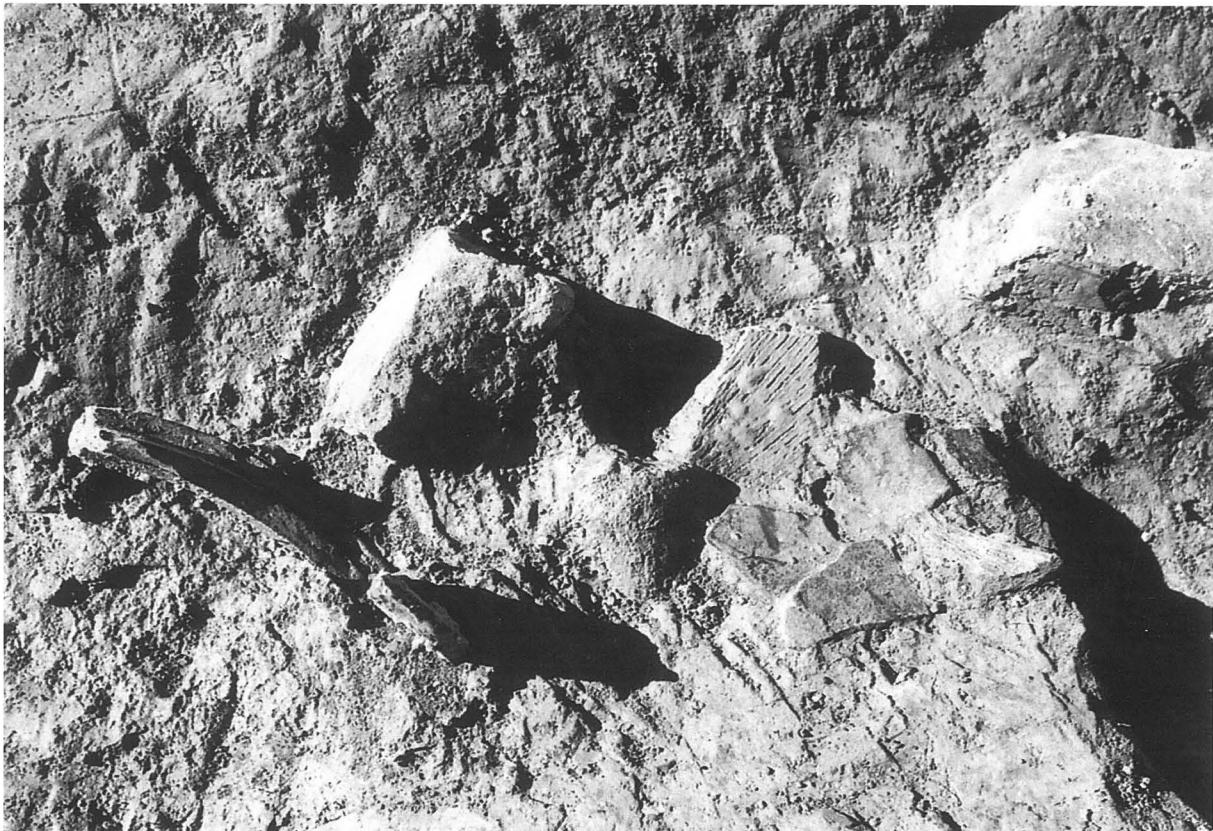


S区SX02検出状況



S区SD01検出状況

図版8



S区 SDO2 遺物出土状況



S区 SDO3 検出状況

図版9



N区完掘状況（北東から）



N区完掘状況（南東から）

図版10



N区SKO4完掘状況



N区SKO7検出状況



N区SK07西土坑検出状況



N区SK07完掘状況

図版12



N区SB01完掘状況（南から）



N区SB01・02完掘状況（西から）

図版13



N区SB03 完掘状況（西から）



N区SD01・SX01 完掘状況

図版14



N区SD02遺物出土状況



N区・SX01遺物出土状況

図版15



1



4



3



4



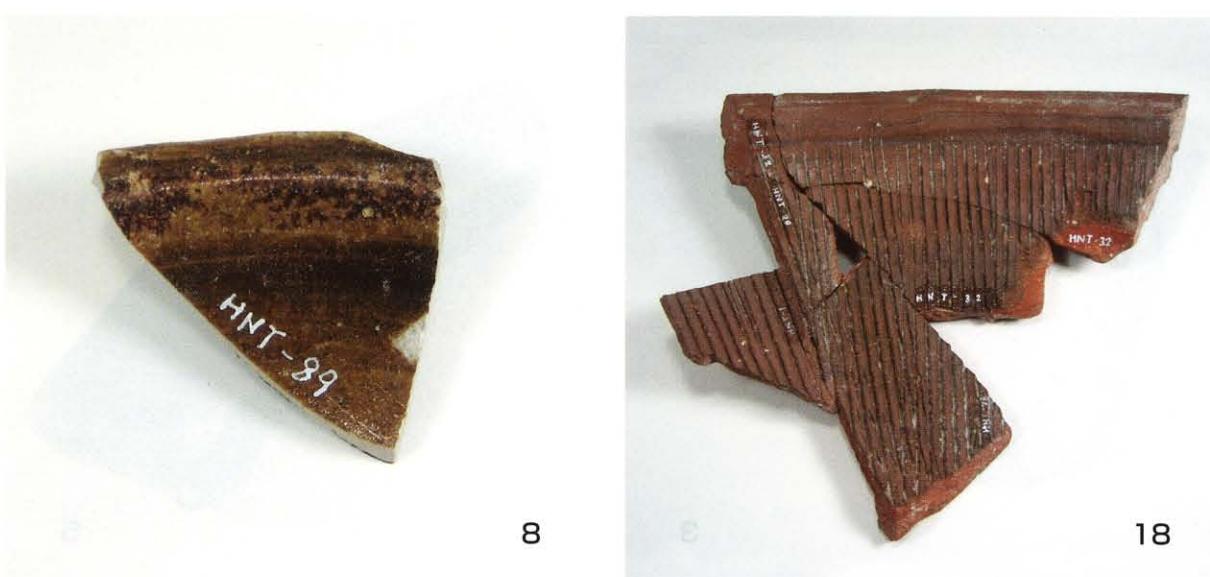
3



5

出土遺物（1）

図版16



出土遺物（2）

図版17



19



22



20



23



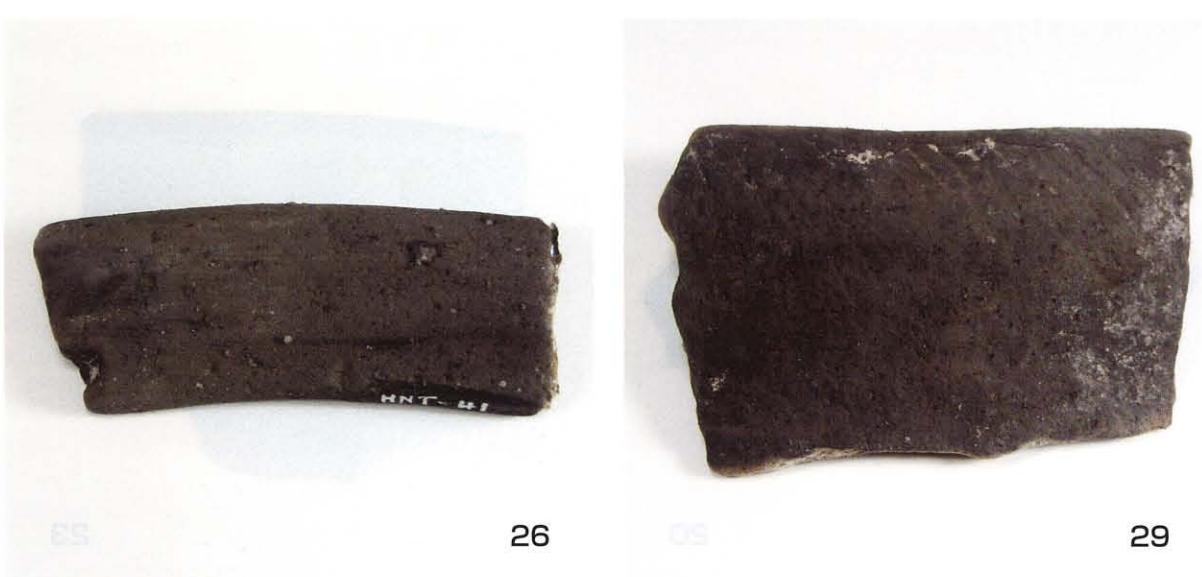
21



24

出土遺物 (3)

図版18



出土遺物 (4)

図版19



31



36



32



37



34



39

出土遺物（5）

図版20



出土遺物（6）

図版21



出土遺物（7）

図版22



54



59



55



60



57



61

出土遺物 (8)

図版23



62



66



63



67



64



68

出土遺物 (9)

図版24



出土遺物（10）

報告書抄録

ふりがな	にげたみなみいせき							
書名	込田南遺跡							
副書名	県営農村振興総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	東かがわ市埋蔵文化財調査報告							
シリーズNo.	第4集							
編著者名	阿河銳二							
編集機関	大川広域行政組合理蔵文化財係							
発行機関	東かがわ市教育委員会							
所在地	〒769-2692 香川県東かがわ市三本松1172番地 TEL0879-26-1238							
発行年月日	西暦 2009年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
市町村	遺跡番号	34° 12' 42"	134° 23' 38"	2008.10.27 ～ 2008.1.30	910m ²	県営農村 総合振興 総合整備 事業		
にげたみなみいせき 込田南遺跡	かがわけんひがし 香川県東かがわ市 ひけた 引田	372072						
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
込田南遺跡	集落	古代		須恵器・土師器			8世紀代の遺物と 近世の遺構・遺物を検出する。土坑の中には早桶も想定される。この他、 縄文時代草創期の有舌尖頭器が出土する。	
		近世	土坑・溝・柱穴	土師質土器・陶磁器 土製品				

県営農村振興総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

汎田南遺跡

平成21年3月31日

編集 大川広域行政組合

発行 東かがわ市教育委員会

〒769-2692 香川県東かがわ市三本松1172番地

T E L 0879-26-1238

印刷 ナカハタ印刷株式会社